

東日本大震災から 10 年

報告書

福島からの原発避難と生活復興
—栃木県における避難生活に関する課題調査—

2021 年

認定 NPO 法人とちぎボランティアネットワーク
(とちぎ暮らし応援会)

はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年の時間が経過し、避難者の避難先での生活も長期化・定着化してきている。本調査は、原発避難という国内初の事態に直面した避難者本人から、発災当時の状況、現在に至るまでの生活環境の変化、教訓などについて改めて整理を行い、「個人の記憶を、社会（みんな）の記録」にしていくことを目的に実施したものである。本調査の枠組みの要点は、一方では被災者・避難者本人によるふりかえりと **Reframing**（リフレーミング＝過去の教訓化、相対化、捉えなおし）を、他方では、次世代への継承として、災害を直接経験していない大学生等の世代によるインタビュー等を通じて記録化（アーカイブ化）し、社会への発信につなげていくことにある。

認定 NPO 法人とちぎボランティアネットワーク
（とちぎ暮らし応援会）調査担当者

矢野正広・矢野浩美・門馬芳子・坪井壱太郎

目次

第1部 東日本大震災と福島県一被害概況と原子力発電所事故	
－ 東日本大震災と福島県	6
－ 福島第一原子力発電所と50km圏域の人口・世帯	8
－ 原子力発電所事故による避難区域の変遷	9
第2部 東日本大震災と福島県一被害概況と原子力発電所事故	
－ 福島県から全国への避難状況の変化	12
－ 全国地方別・避難者数の変動	18
－ 全国地方別・福島県からの避難者数の推移	19
－ 都道府県別・福島県からの避難者数の推移	23
－ 栃木県への避難者数の推移	29
第3部 栃木県への避難者を対象とした質問紙調査	
－ 質問紙調査・基本統計	31
－ ①「震災前」と「現在」の居住形態	32
－ ②「避難拠点」と「生活居住拠点」の移動回数	33
－ ③ 震災発生から現在までの心の変化	34
－ ④ 震災後に利用した支援	37
－ ⑤ 生活復興感の推移	38
－ ⑥ 現在の復興感の割合	40
－ ⑦「助かったと思う支援」の内容（自由記述）	41
－ ⑧「必要だと思う支援」の内容（自由記述）	46
－ ⑨「これからの世代に伝えたいこと」の内容（自由記述）	50
第4部 栃木県への避難者を対象とした聞き取り調査	
－ ① 被災者・避難者ヒアリング調査	56
－ ② 被災者・避難者ヒアリング調査	59
－ ③ 被災者・避難者ヒアリング調査	61
－ ④ 被災者・避難者ヒアリング調査	64
－ ⑤ 被災者・避難者ヒアリング調査	66

第5部 次世代への継承と社会への発信	
－ 被災経験と教訓の次世代への継承と社会への発信 ……………	69
－ 「被災者・避難者」×「未災者（大学生）」ラジオ対談 ……………	70
－ 福島県から栃木県への避難者に向けて刊行した「とちぎ暮らしの手帖」 ……………	72
第6部 災害を「伝える」を考える	
－ 被災経験の継承と共有－「次」「他」「多」世代と地域に向けた伝え方の検討 ……	74
－ 次世代キュレーション－災害を学ぶ「防災教育」に向けて－ ……………	75
参考資料（質問紙調査票） ……………	78

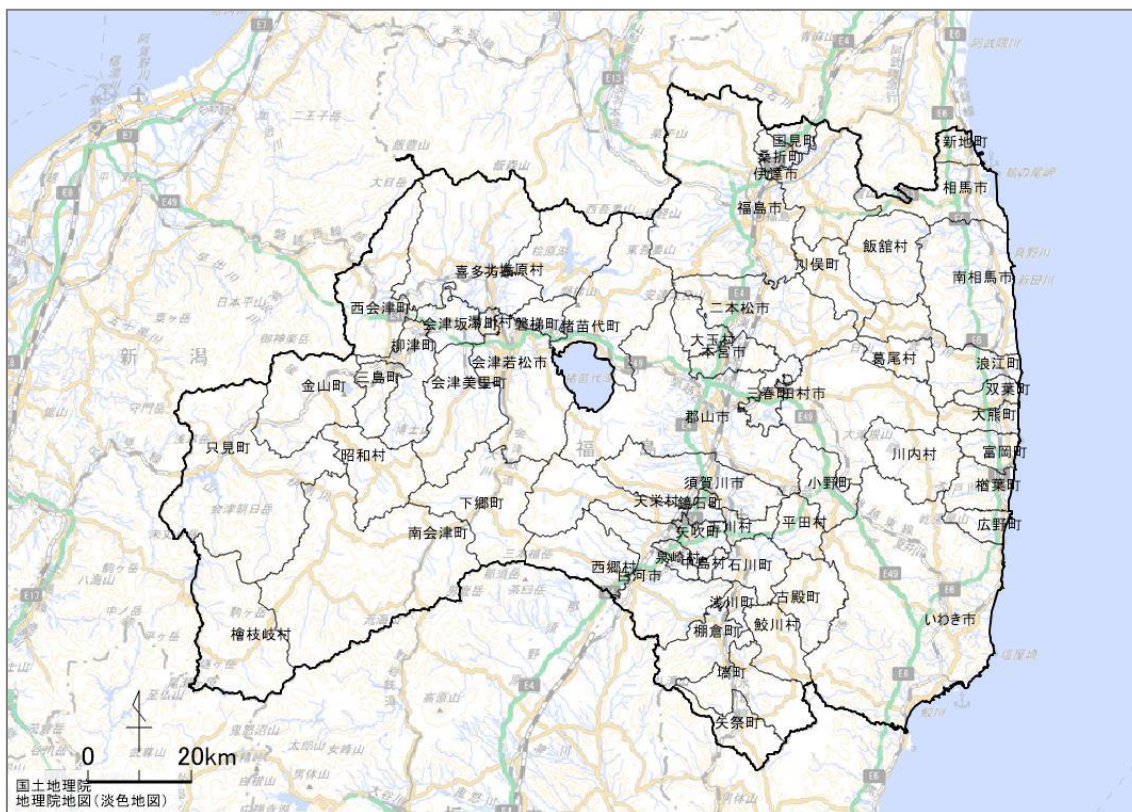
第 1 部 東日本大震災と福島県

被害概況と原子力発電所事故

東日本大震災と福島県

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、巨大地震に伴い発生した津波の来襲により、広域にわたる沿岸域の被害が発生したほか、福島県に立地する原子力発電所の事故の発生に伴う、大規模な避難を要する災害となった。同災害における全国への避難者総数は、復興庁による最新統計（2020年12月25日時点）では、42,415人が記録されており、このうち、岩手県（930人）、福島県（29,307人）、宮城県（3,768人）の3県合計は、全体の80.2%を占める。特に、福島県からの避難者数は他県より突出して多いことが特徴となっている。

福島県からの避難者に対しては、「ふくしま連携復興センター」により全国26箇所に生活再建支援拠点が設置され、相談対応や交流会の開催などを通して被災者支援が継続されている。本調査では、栃木県の拠点である認定NPO法人とちぎボランティアネットワーク（とちぎ暮らし応援会）を主体として実施し、まず、東日本大震災における10年間の避難状況を概観し、次いで福島県から栃木県への避難者を対象とした質問紙調査により、生活復興や支援の課題等の検証を行った。また、次世代へ経験を継承するための取組として、「被災当事者」から主として大学生等の「未災者」への語り継ぎと発信を、コミュニティFM放送を通して実施した。

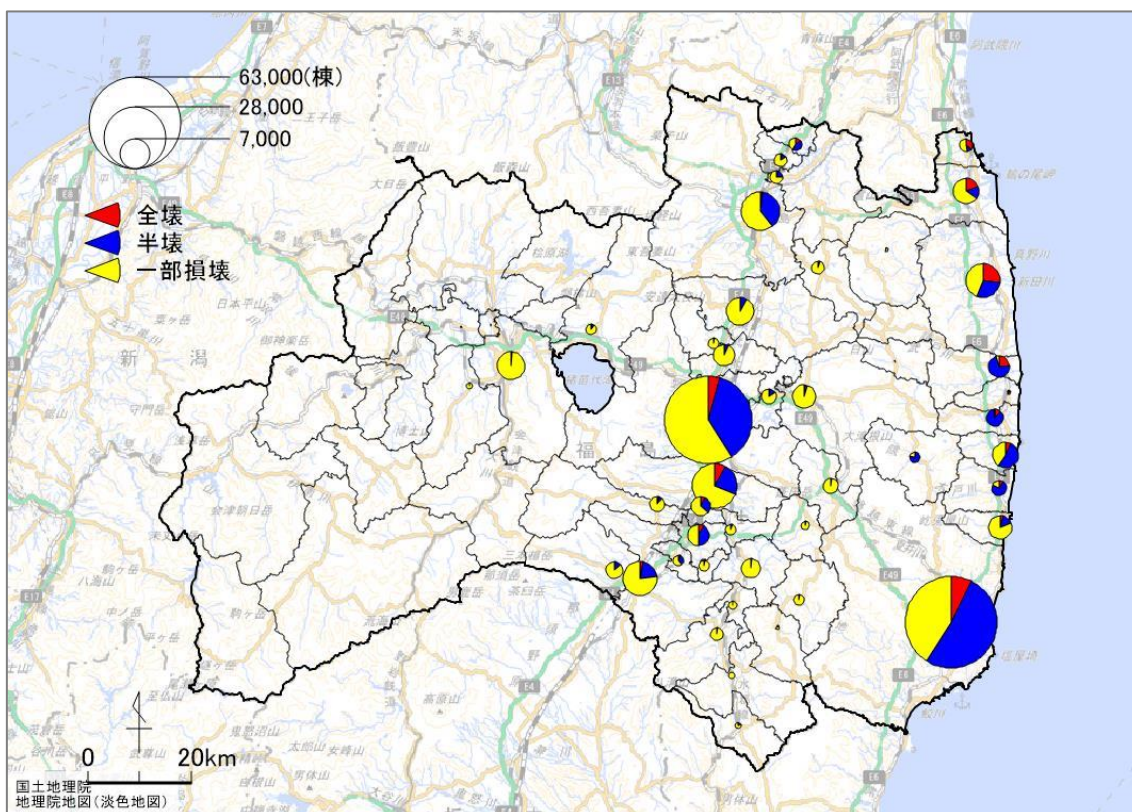


福島県市町村位置図

福島県における東日本大震災の「人的被害」では、主として浜通り地域において発生し、直接死 1,606 人に対し、災害関連死が 2,316 人となっているほか、死亡届等の合計値で、4,147 人（2021 年 1 月 8 日時点）となっている。また、「住家被害」では、下図に示す通り、浜通り地域と中通り地域において発生がみられ、特に中通り地域における「一部損壊」の割合が高いことが特徴となっている。

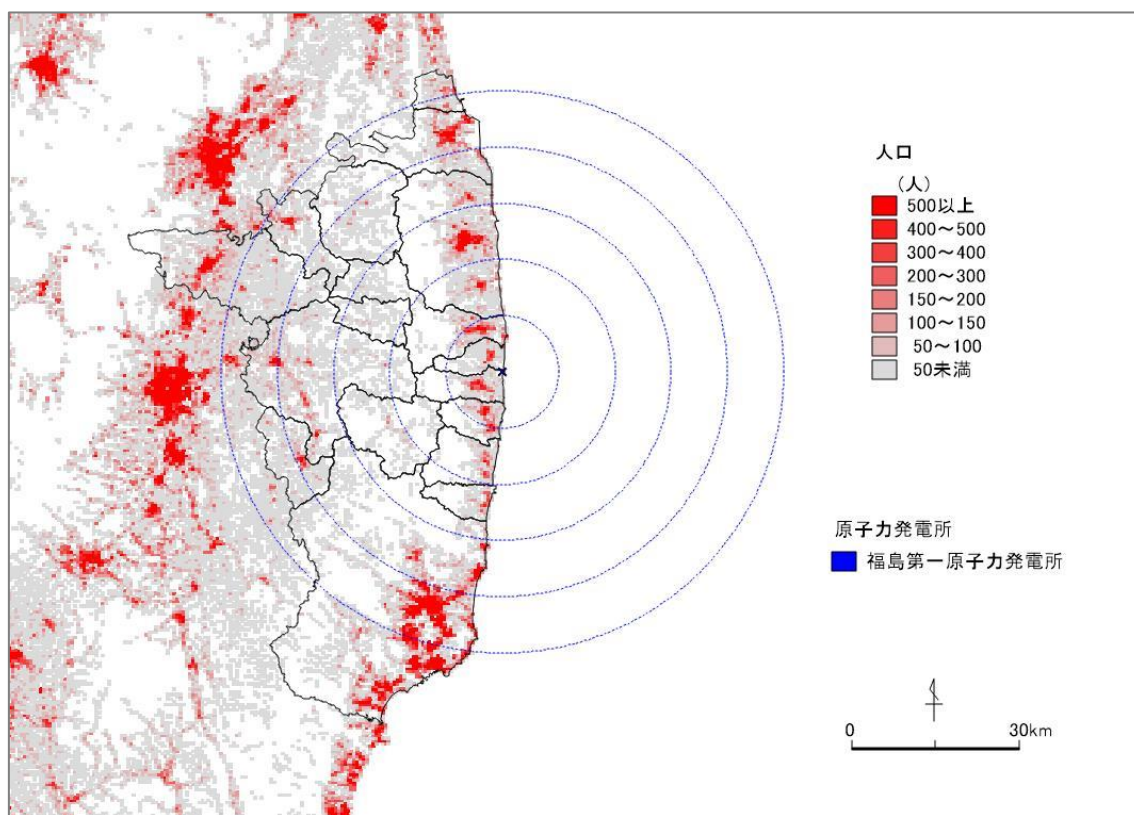
浜通り地域の自治体における住家被害状況

	全壊 (棟)	半壊 (棟)	一部損壊 (棟)		全壊 (棟)	半壊 (棟)	一部損壊 (棟)
相馬市	1004	833	3397	双葉町	103	14	1
南相馬市	2323	2430	3718	浪江町	772	2384	154
広野町	160	593	3244	葛尾村	0	31	1
檜葉町	147	1218	289	新地町	439	138	669
富岡町	355	2819	2130	飯館村	0	1	113
川内村	8	568	167	いわき市	4644	32921	26004
大熊町	272	2075	26	福島全体	15435	82783	141054



福島県における市町村別住家被害の状況

福島第一原子力発電所と 50 km圏域の人口・世帯



福島第一原子力発電所からの距離圏域（10 km～50 km）

福島第一原子力発電所からの各圏域内人口と世帯（実数・構成比）

	人口		世帯	
	人口 (人)	割合 (%)	世帯 (世帯)	割合 (%)
0～10km 圏域	46,868	9.5	16,839	9.8
10～20km 圏域	29,323	5.9	9,090	5.3
20～30km 圏域	61,877	12.6	21,472	12.5
30～40km 圏域	91,731	18.6	28,743	16.7
40～50km 圏域	263,059	53.4	95,707	55.7
合計	492,858	100.0	171,851	100.0

NOTE : 2010 年国勢調査 4 次メッシュ (500m メッシュ) データより算出

本図・表は、2010 年国勢調査 4 次メッシュデータにより、GIS（地理情報システム：Geographic Information System）を用いて、福島第一原子力発電所から 10 km圏域別に人口と世帯の集計を行った結果を示す。30km 圏内の人口は、138,068 人であり、50 km圏域内人口の 28.0%を占める。同世帯数は、47,401 世帯（27.6%）であった。

原子力発電所事故による避難区域の変遷

● 震災直後の避難指示

- ー 福島第一原子力発電所から半径 20 km圏内居住者に避難指示 (2011/03/12)
- ー 福島第一原子力発電所から半径 20～30 km圏内居住者に屋内退避指示 (2012/03/15)

● 2011年4月22日時点

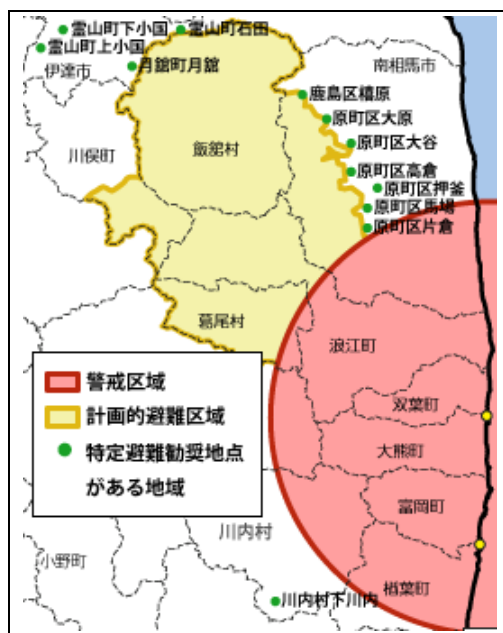
緊急時の被ばく状況で放射線から身を守るための国際的な基準値 (年間 20～100 ミリシーベルト) を参考にしながら、3つの避難区域設定。

- ① 原発から 20km 圏外の区域を「計画的避難区域」として決めて、国が区域内の居住者に対して避難要請。
- ② 原発から 20～30km 圏内を「緊急時避難準備区域」として、緊急時に屋内退避か避難。本区域は 2011年9月30日に解除
- ③ 原発から 20km 圏内は例外を除き、立ち入りを禁止する「警戒区域」に設定。



● 2011年9月30日時点

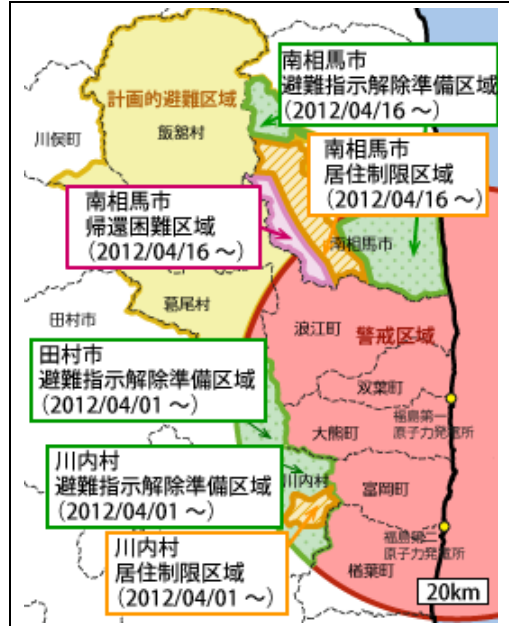
「警戒区域」や「計画的避難区域」以外でも、風向きや地形によって、事故後1年間の積算線量が 20 ミリシーベルト以上になると予想された地域や地区 12 箇所について「特定避難勧奨地点」として、国が避難を要請。(2014年12月28日に全て解除)



● 2012年4月1日時点

地域の復興再生を進めるために「警戒区域」と「計画的避難区域」の一部を年間積算線量の状況に応じて、更に3つの区域に見直しが行われた。

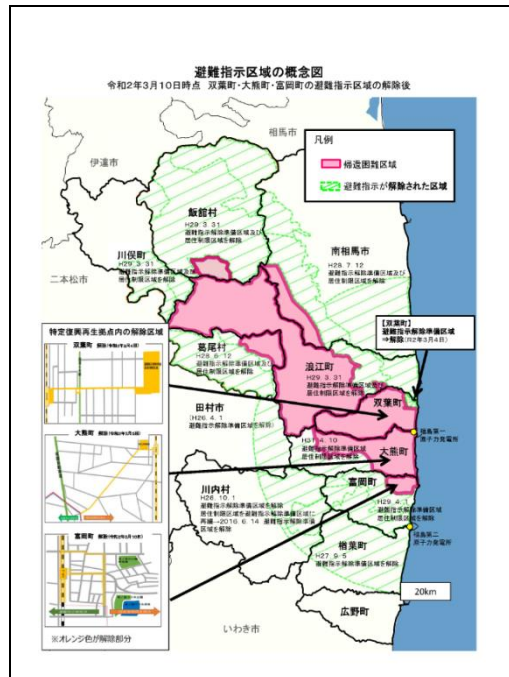
- ① 「避難指示解除準備区域」は、年間積算線量 20 ミリシーベルト以下が確認された地域。店舗、事業や営農等の再開可能。
- ② 「居住制限区域」は、年間積算線量 20 ミリシーベルト以上が想定される地域。住民の一時委託や道路復旧のための立ち入り可能。
- ③ 「帰還困難区域」は、年間積算線量 50 ミリシーベルト以上が想定される地域。



● 2020年3月10日時点

避難指示区域の見直しにより、かつての「警戒区域」や「計画的避難区域」は、全て「避難指示解除準備区域」、「居住制限区域」、「帰還困難区域」のいずれかに見直し再編が行われた。

その後、田村市の都路地区、川内村、檜葉町、葛尾村（一部地域を除く）、南相馬市（一部地域を除く）、川俣町の山木屋地区、飯舘村（一部地域を除く）、浪江町（一部地域を除く）、富岡町（一部地域を除く）、大熊町（一部地域を除く）、双葉町（一部地域を除く）の避難指示解除が行われ、徐々に住民の方が帰れる区域が増加している。

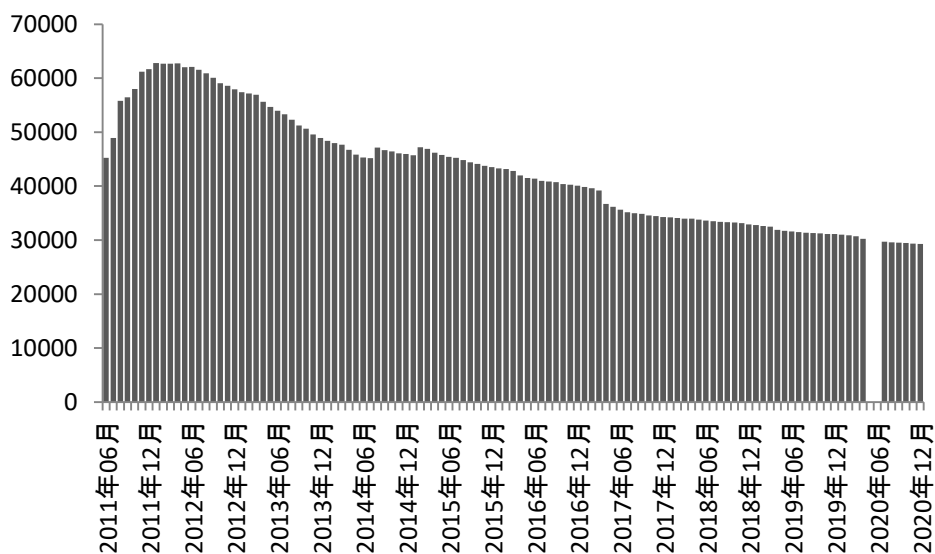


第2部 福島県からの避難者数動向

全国都道府県・地方別および栃木県への避難者数動向

福島県からの全国への避難状況の変化

- 全国避難者数（2011年12月＝61,659人から2020年11月＝29,359人へ減少）
- 都道府県別増減割合のうち「増加」は、宮城県・栃木県（+10.3%）・宮崎県
- 栃木県の避難者数（2011年12月＝2,502人から2020年11月＝2,759人）
- 栃木県の避難状況内訳＝2,759人中、「住宅」（73.2%）「親族」（26.4%）



全国における福島県からの避難者数の10年間の動向（2011年6月～2020年12月）

全国比率上位11都県における避難者人数と割合の変化

	避難者実数 (人)			全国比 (%) 対全避難者数		
	2012年1月	2020年12月	増減 (人)	2012年1月	2020年12月	増減 (%)
北海道	1,846	873	-973	2.94	2.98	0.04
宮城県	1,810	2,730	920	2.88	9.32	6.44
山形県	13,033	1,455	-11,578	20.75	4.96	-15.79
茨城県	3,612	3,066	-546	5.75	10.46	4.71
栃木県	2,710	2,756	46	4.31	9.40	5.09
群馬県	1,921	681	-1,240	3.06	2.32	-0.74
埼玉県	4,593	2,672	-1,921	7.31	9.12	1.81
千葉県	3,214	2,114	-1,100	5.12	7.21	2.09
東京都	7,570	3,011	-4,559	12.05	10.27	-1.78
神奈川県	2,572	1,813	-759	4.10	6.19	2.09
新潟県	6,383	2,185	-4,198	10.64	7.46	-3.18

地方名	都道府県	2011年	2020年				増減率	増減数
		2011年 12/15	2020年 11/11	避難状況内訳			2011年 2020年	2011年 2020年
				内訳A 住宅等	内訳B 親族等	内訳C 病院等		
—	—	人	人	人	人	人	%	人
北海道	北海道	1,825	872	608	260	4	- 52.2	- 953
東北	青森県	639	179	26	152	1	- 72.0	- 460
	岩手県	600	347	26	320	1	- 42.2	- 253
	宮城県	1,687	2,730	1534	1,188	8	+ 61.8	+ 1043
	秋田県	1,173	386	162	224	0	- 67.1	- 787
	山形県	12,945	1,458	801	651	6	- 88.7	- 11487
	福島県	—	—	—	—	—	—	—
関東	茨城県	3,150	3,063	1,415	1,610	38	- 2.8	- 87
	栃木県	2,502	2,759	2,020	727	12	+ 10.3	+ 257
	群馬県	1,977	681	385	288	8	- 65.6	- 1296
	埼玉県	4,701	2,673	969	1,681	23	- 43.1	- 2028
	千葉県	3,126	2,112	917	1,173	22	- 32.4	- 1014
	東京都	7,421	3,042	1,795	1,223	24	- 59.0	- 4379
	神奈川県	2,449	1,795	49	1,739	7	- 26.7	- 654
中部	新潟県	6,692	2,193	1,365	821	7	- 67.2	- 4499
	富山県	311	98	27	71	0	- 68.5	- 213
	石川県	398	78	44	33	1	- 80.4	- 320
	福井県	402	122	108	14	0	- 69.7	- 280
	山梨県	718	450	366	84	0	- 37.3	- 268
	長野県	967	531	370	160	1	- 45.1	- 436
	岐阜県	292	138	93	45	0	- 52.7	- 154
	静岡県	1015	376	238	138	0	- 63.0	- 639
	愛知県	814	516	469	47	0	- 36.6	- 298
近畿	三重県	213	127	90	37	0	- 40.4	- 86
	滋賀県	249	112	54	58	0	- 55.0	- 137
	京都府	771	238	1	237	0	- 69.1	- 533
	大阪府	903	361	227	133	1	- 60.0	- 542
	兵庫県	552	413	257	156	0	- 25.2	- 139
	奈良県	87	39	31	8	0	- 55.2	- 48
	和歌山県	69	25	12	13	0	- 63.8	- 44

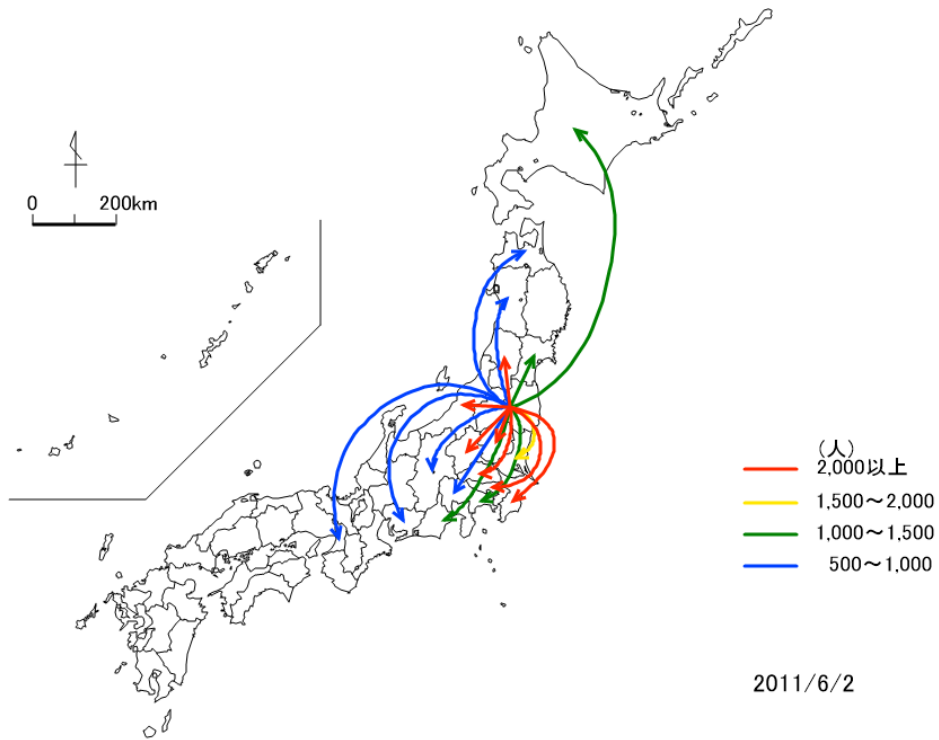
中国	鳥取県	115	44	28	16	0	- 61.7	- 71
	島根県	118	49	41	6	2	- 58.5	- 69
	岡山県	266	201	112	89	0	- 24.4	- 65
	広島県	294	167	81	86	0	- 43.2	- 127
	山口県	89	51	41	10	0	- 42.7	- 38
四国	徳島県	87	10	9	1	0	- 88.5	- 77
	香川県	50	25	23	2	0	- 50.0	- 25
	愛媛県	158	28	22	6	0	- 82.3	- 130
	高知県	61	23	3	20	0	- 62.3	- 38
九州	福岡県	347	283	207	76	0	- 18.4	- 64
	佐賀県	156	47	35	12	0	- 69.9	- 109
	長崎県	111	46	35	11	0	- 58.6	- 65
	熊本県	99	75	52	23	0	- 24.2	- 24
	大分県	196	64	63	0	1	- 67.3	- 132
	宮崎県	130	149	90	59	0	+ 14.6	+ 19
	鹿児島県	150	49	34	15	0	- 67.3	- 101
沖縄	沖縄県	584	134	119	15	0	- 77.1	- 450
全国	総計	61659	29359	15454	13738	167	- 52.4	-32300

資料:復興庁「全国の避難者数」調査のうち福島県分を抽出

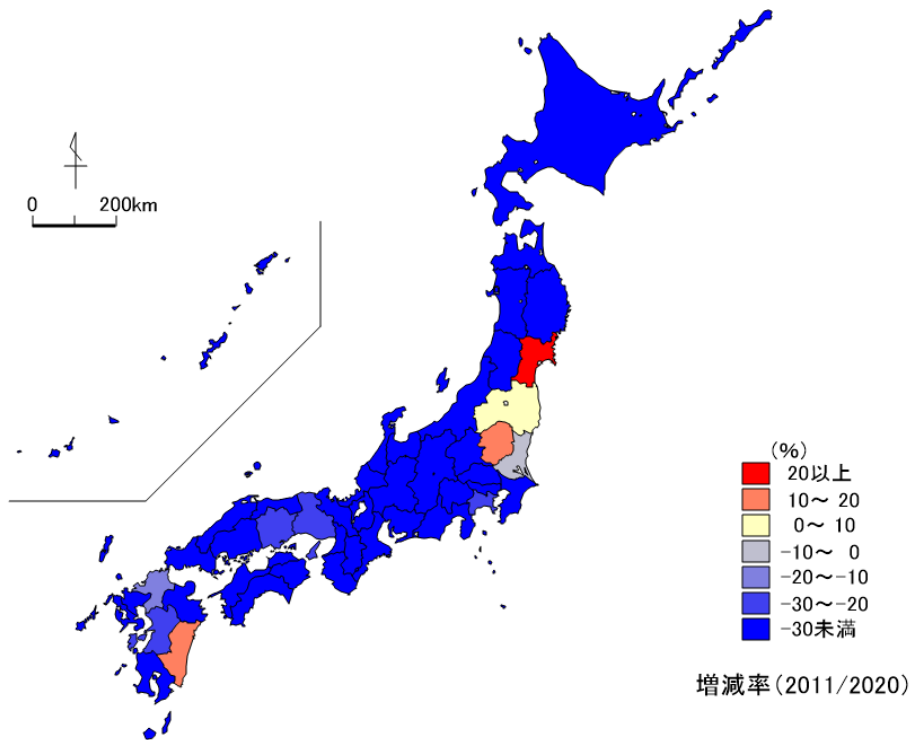
注:地方分類は「復興庁」資料に準拠

東日本大震災による全国の避難者動向については、復興庁により集計・公表されており、発災した2011年6月から2012年3月までは毎月2回、その後は毎月1回の都道府県別の集計が行われている。同統計によると、福島県から県外へ避難した人数の最大値は、発災から約1年後の2012年3月8日時点における「62,831人」となっている。

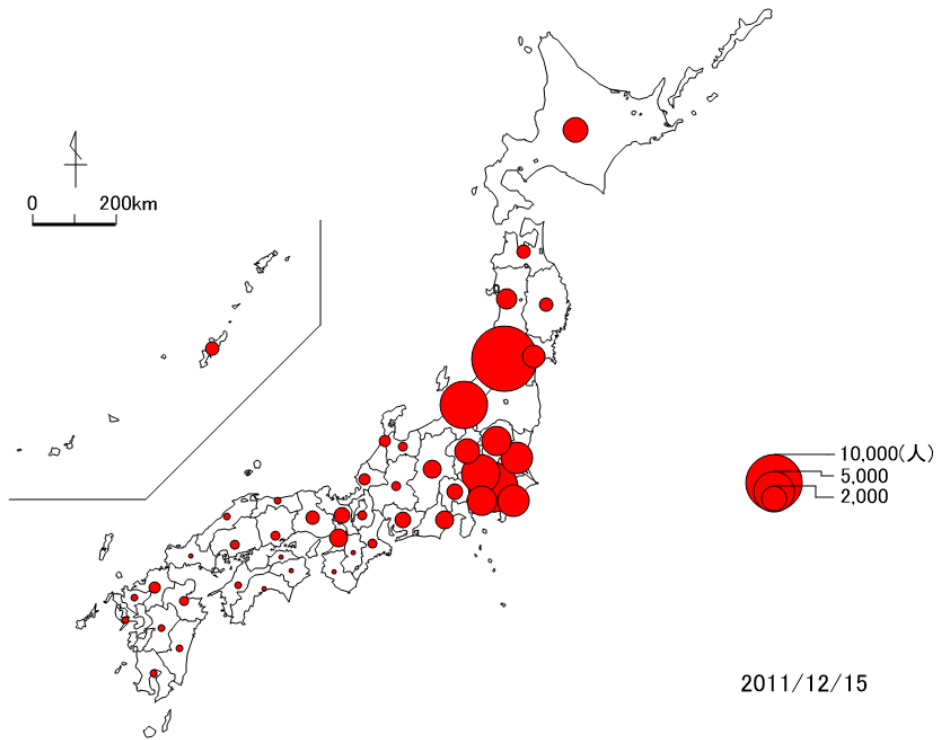
発災後における避難動向では、東北地方における山形県や宮城県への移動のほか、東京都、埼玉県、千葉県のほか、茨城県や栃木県など「近県」「隣接県」への移動数が多いことが特徴となっている。発災から10年を経て避難者数はほぼ半減しており、地域による避難者数の差異もみられるが、依然として、福島県からの県外避難者は約3万人となっている。



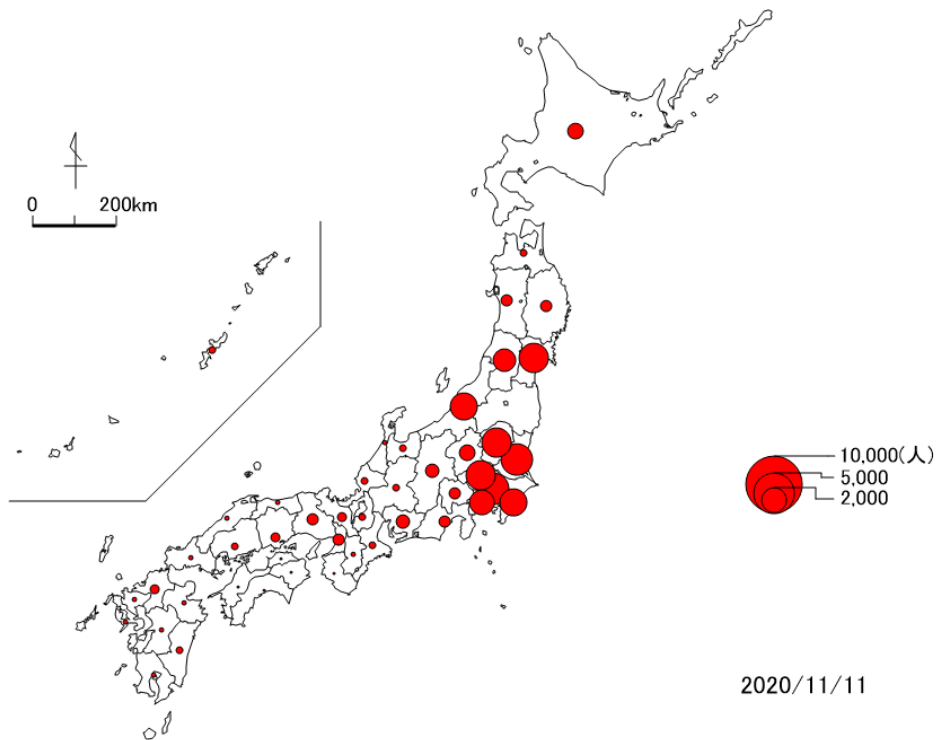
2011年6月における福島県から他都道府県への避難移動状況



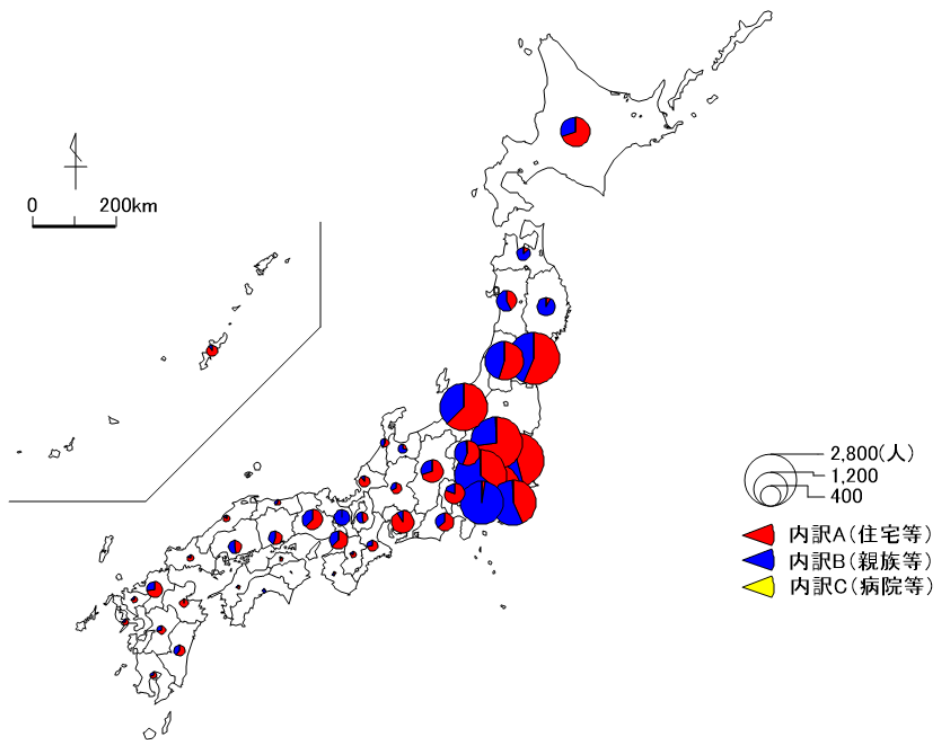
2011年(12月)と2020年(11月)における避難者数の増減率(%)



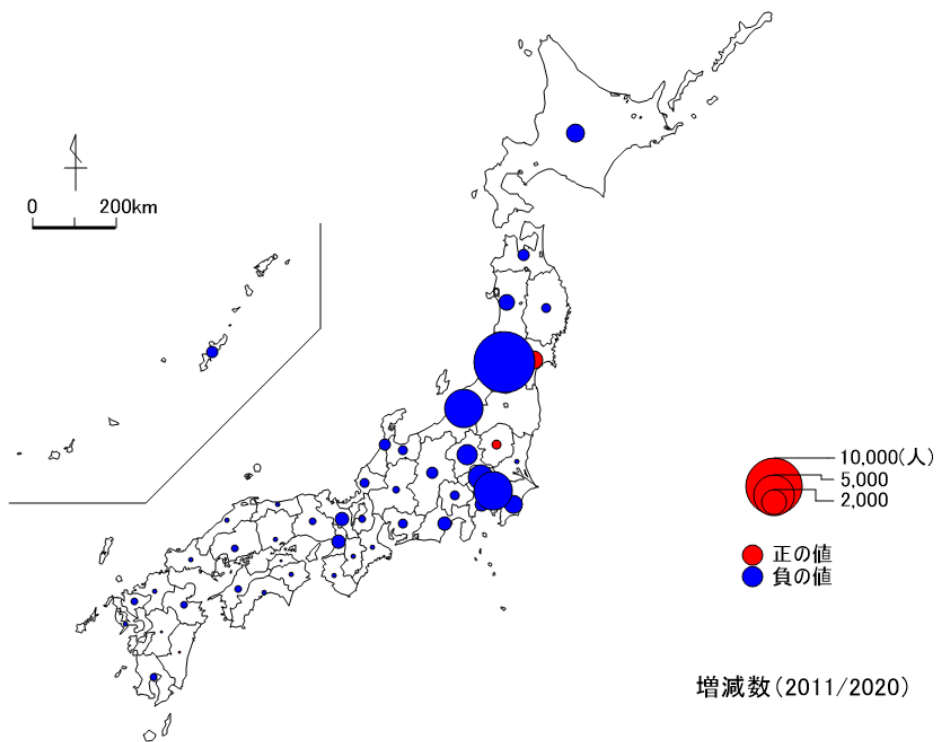
2011年12月15日時点における都道府県別の福島県からの避難者数



2020年11月11日時点における都道府県別の福島県からの避難者数



2020年11月11日時点における都道府県別の福島県からの避難状況内訳



2011年(12月)と2020年(11月)における避難者数の増減数(人)

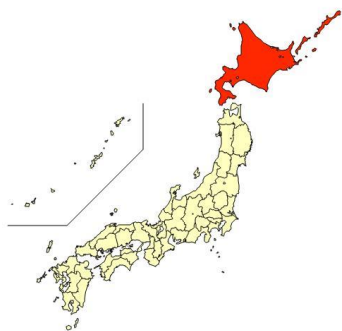
全国地方別・避難者数変動

- 避難者の移動状況をより詳細に検討する観点から 11 地方別に分類作図・検討
- 東北地方の避難者構成比の減少（2011 年：27.5%→2020 年：17.5%）
- 南関東地方の避難者構成比の増加（2011 年：28.6%→2020 年：32.8%）
- 北関東地方の避難者構成比の増加（2011 年：13.1%→2020 年：22.2%）

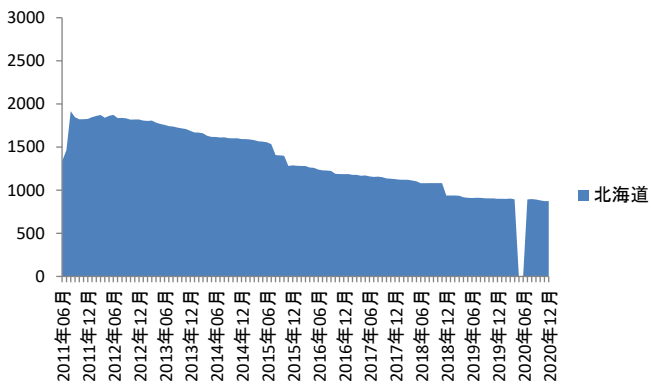
地方名	都道府県名					
北海道地方	北海道					
東北地方	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県
南関東地方	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県		
北関東地方	茨城県	群馬県	栃木県			
甲信越地方	長野県	山梨県	新潟県			
北陸地方	富山県	石川県	福井県			
東海地方	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県		
近畿地方	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県
中国地方	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	
四国地方	徳島県	香川県	愛媛県	高知県		
九州地方	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県
	鹿児島県	沖縄県				

	2012 年 01 月		2020 年 12 月		増減数
	人	構成比 (%)	人	構成比 (%)	人
北海道地方	1,846	2.9	873	3.0	-973
東北地方	17,299	27.5	5,095	17.4	-12,204
北関東地方	8,243	13.1	6,503	22.2	-1,740
南関東地方	17,949	28.6	9,610	32.8	-8,339
北陸地方	1,044	1.7	298	1.0	-746
甲信越地方	8,403	13.4	3,164	10.8	-5,239
東海地方	2,351	3.7	1,154	3.9	-1,197
近畿地方	2,637	4.2	1,173	4.0	-1,464
中国地方	885	1.4	507	1.7	-378
四国地方	334	0.5	86	0.3	-248
九州地方	1,817	2.9	844	2.9	-973
合計	62,808	100.0	29,307	100.0	-33,501

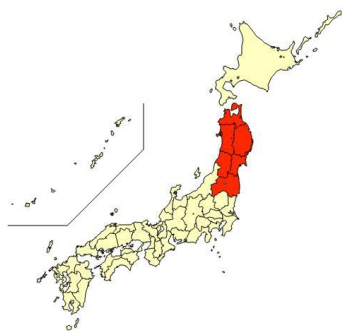
全国地方別・福島県からの避難者の推移（2011年6月～2020年12月）



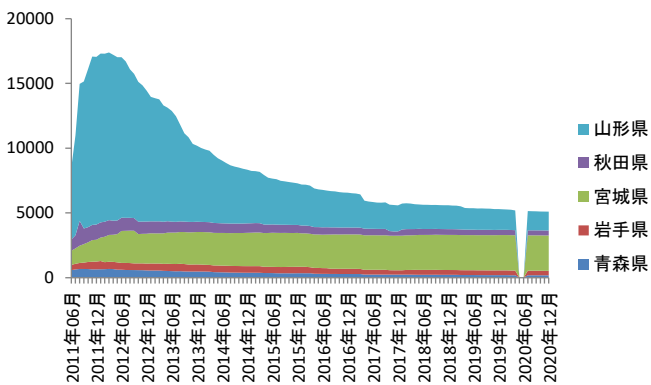
北海道地方



● 1,846人（2012/01）→873人（2020/12）



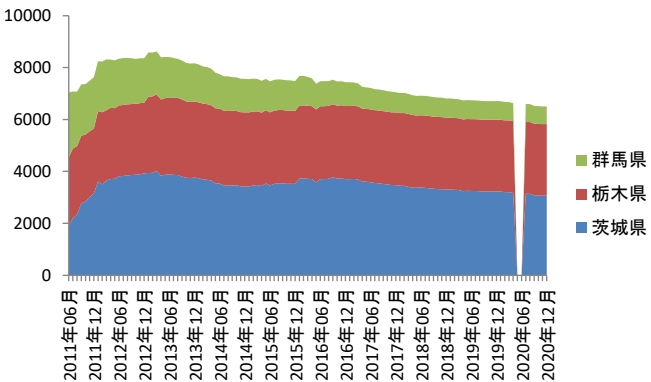
東北地方



● 17,299人（2012/01）→5,095人（2020/12）



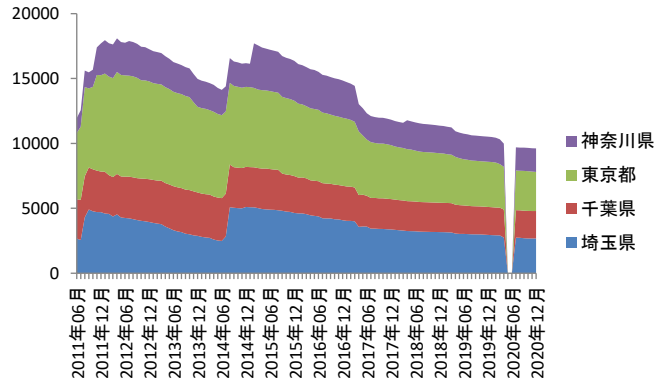
北関東地方



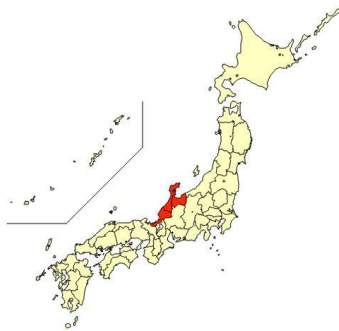
● 8,243人（2012/01）→6,503人（2020/12）



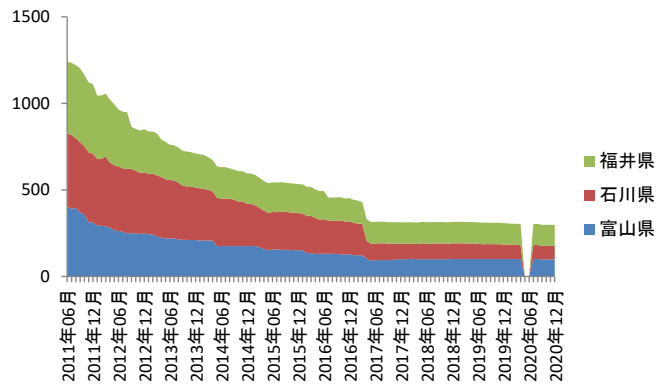
南関東地方



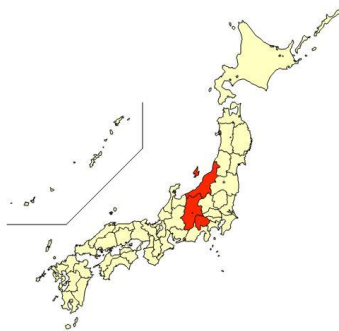
● 17,949 人 (2012/01) → 9,610 (2020/12)



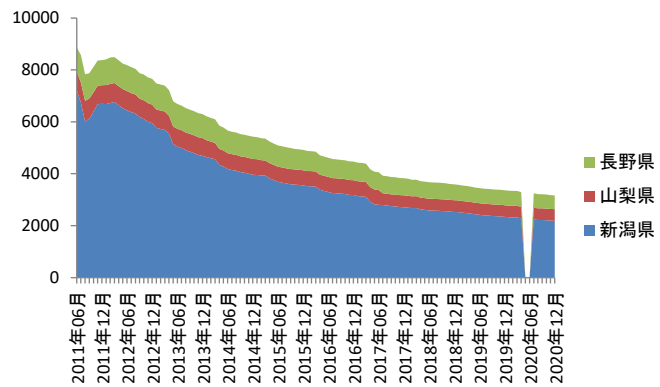
北陸地方



● 1,044 人 (2012/01) → 298 人 (2020/12)



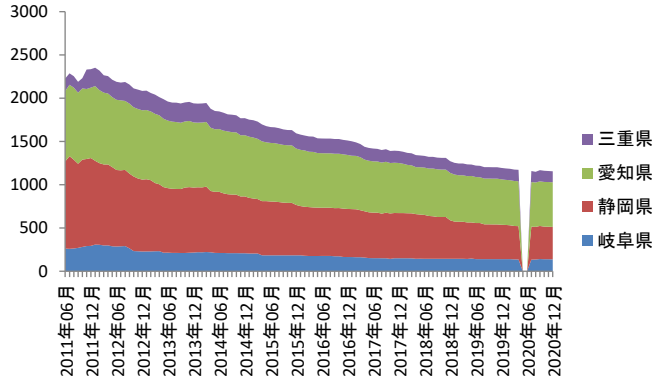
甲信越地方



● 8,403 人 (2012/01) → 3,164 人 (2020/12)



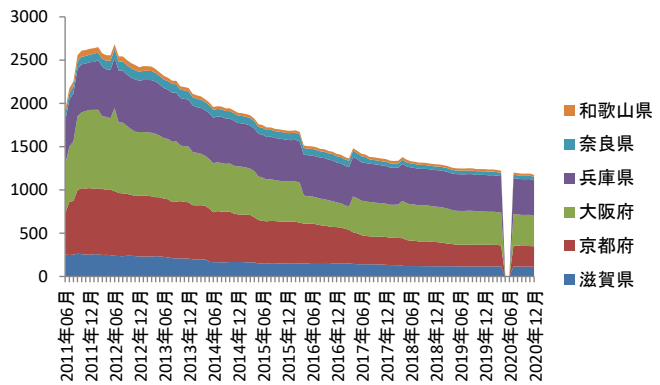
東海地方



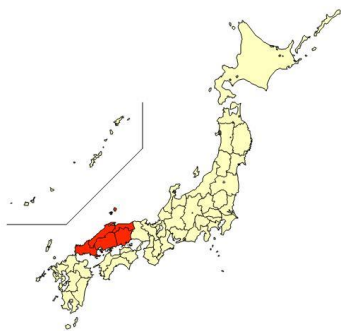
● 2,531人 (2021/01) → 1,154人 (2020/12)



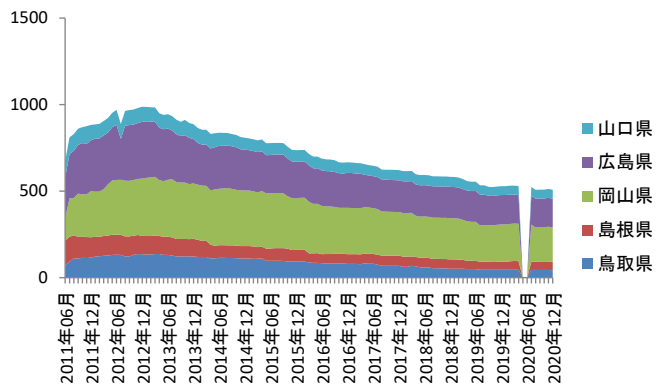
近畿地方



● 2,637人 (2021/01) → 1,173人 (2020/12)



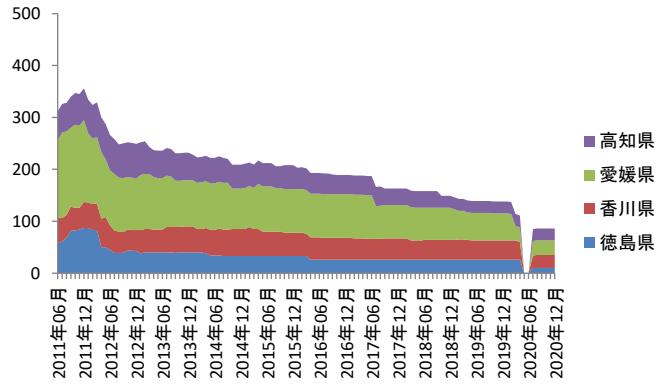
中国地方



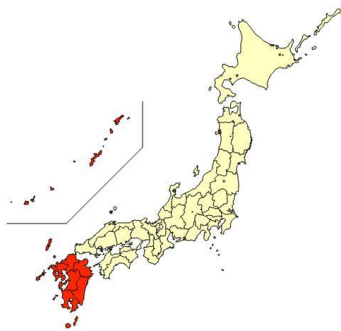
● 885人 (2021/01) → 507人 (2020/12)



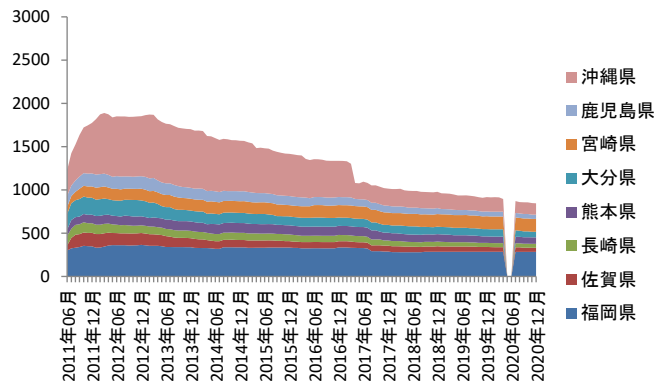
四国地方



● 334人 (2021/01) →86人 (2020/12)



九州地方



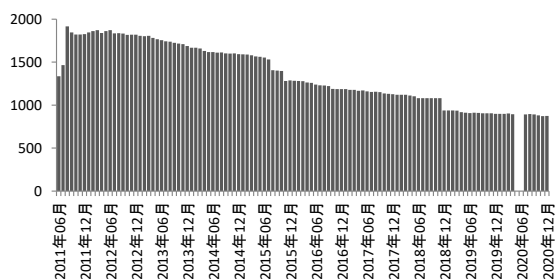
● 1,817人 (2021/01) →844人 (2020/12)

福島県からの県外避難者を地方別にみると、全体的に減少傾向にあるが、このうち、「東北地方」において、山形県への一時的な避難者の増大があったものの、その後において減少がみられたほか、「北関東地方」(茨城県・栃木県・群馬県)については、減少幅が少ないことが特徴となっている。

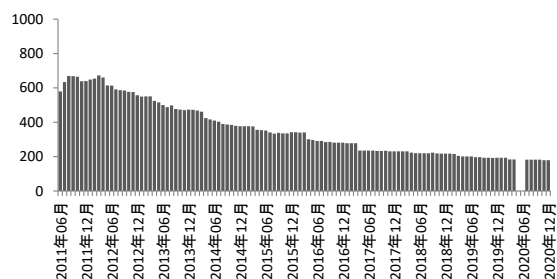
都道府県別・福島県からの避難者数の変化

- 近年の減少数が少なく、避難者の避難先での定住化が進行
- 「宮城県」「栃木県」における避難者の微増
- 2020年5月・6月は新型コロナウイルス対応のため、統計数値なし
- 「岩手県」「栃木県」「茨城県」「福岡県」において避難者数の変動量（小）
- 「山形県」への一時的な避難者数の増大

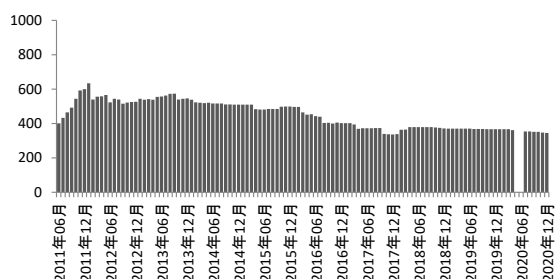
北海道



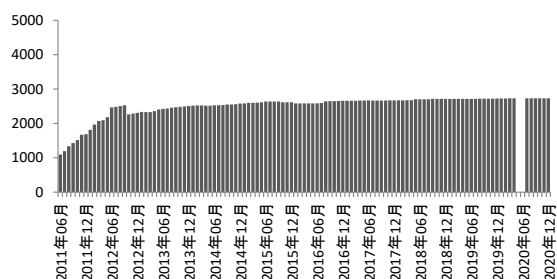
青森県



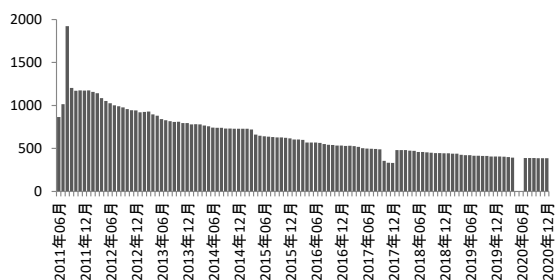
岩手県



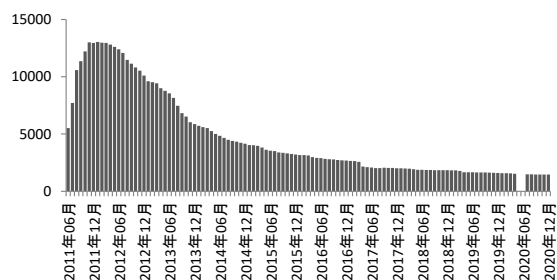
宮城県



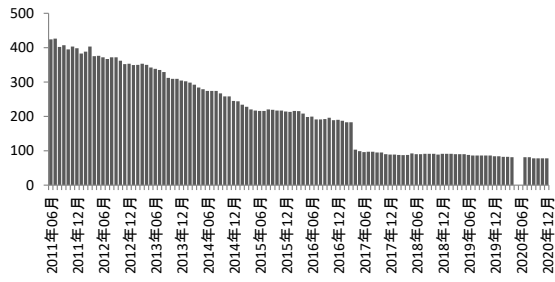
秋田県



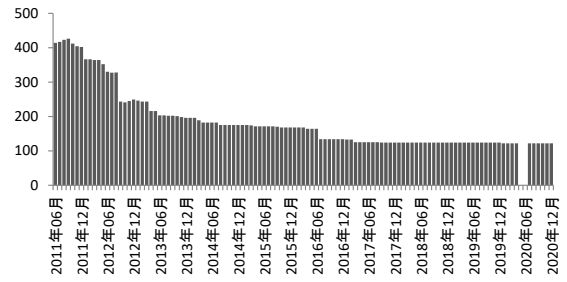
山形県



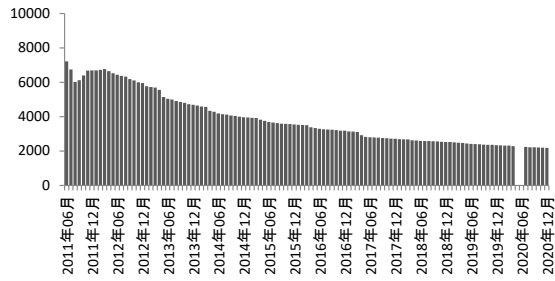
石川県



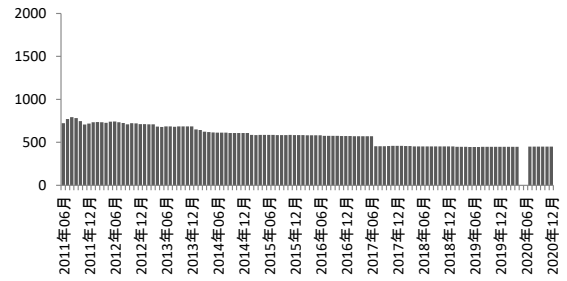
福井県



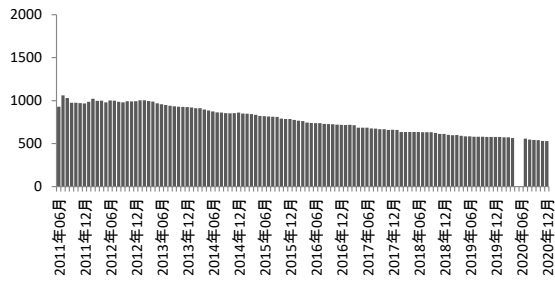
新潟県



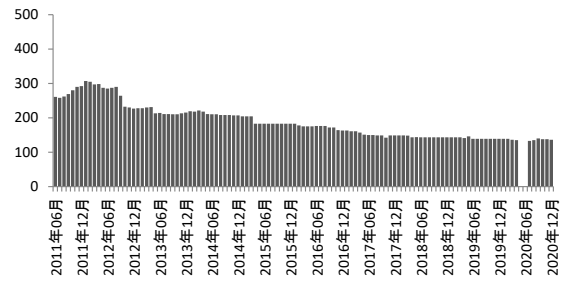
山梨県



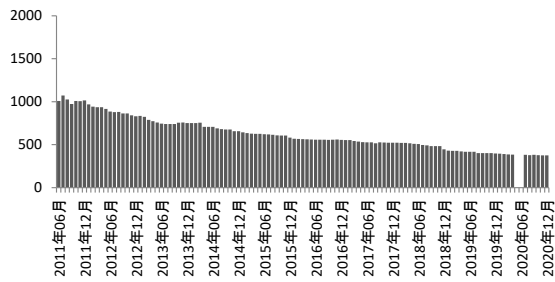
長野県



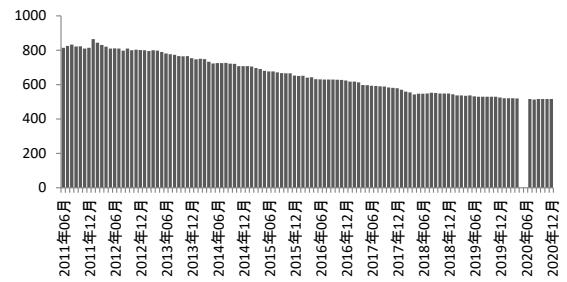
岐阜県



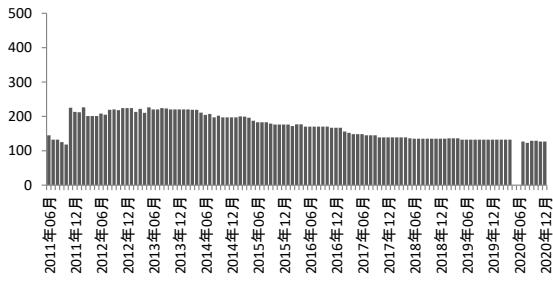
静岡県



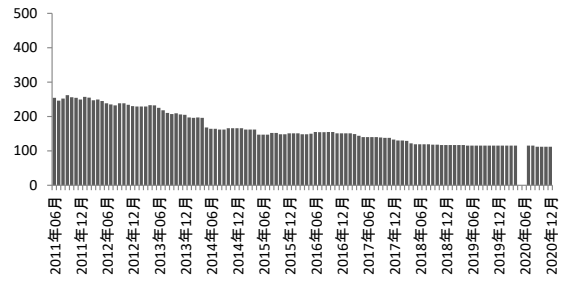
愛知県



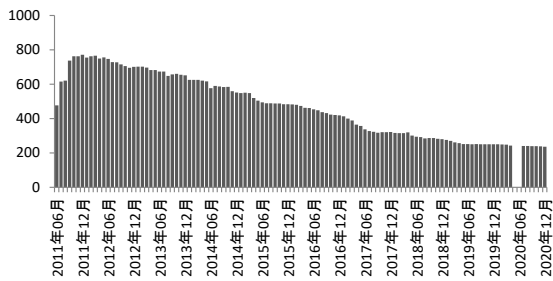
三重県



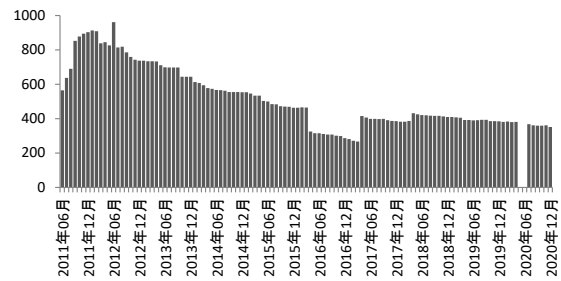
滋賀県



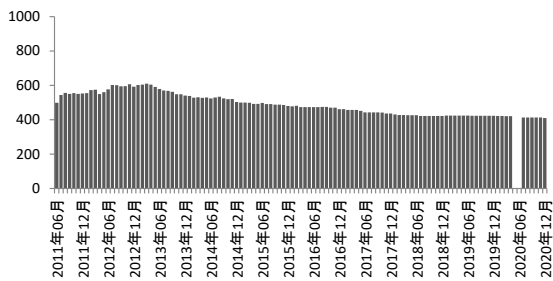
京都府



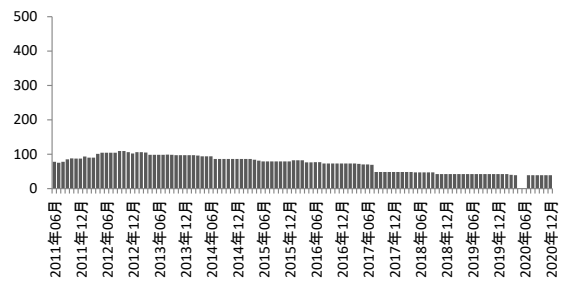
大阪府



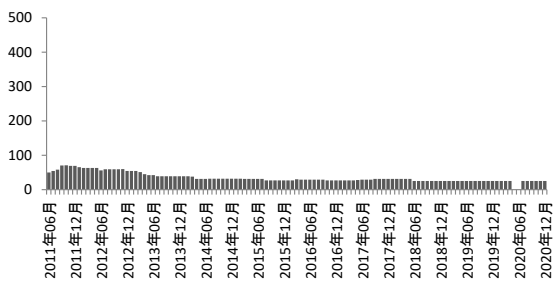
兵庫県



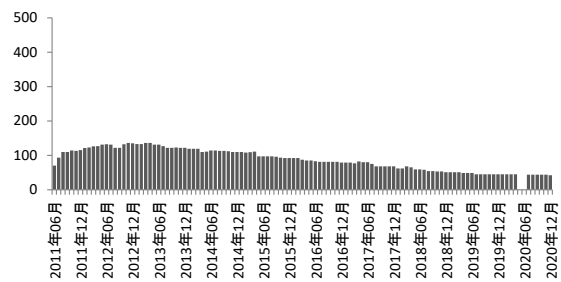
奈良県



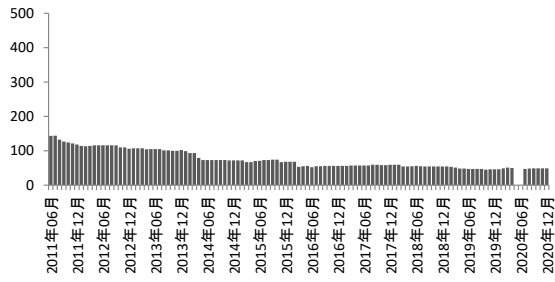
和歌山県



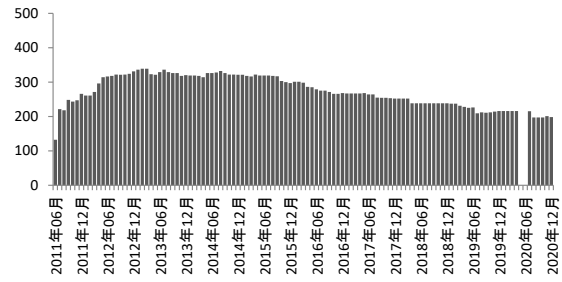
鳥取県



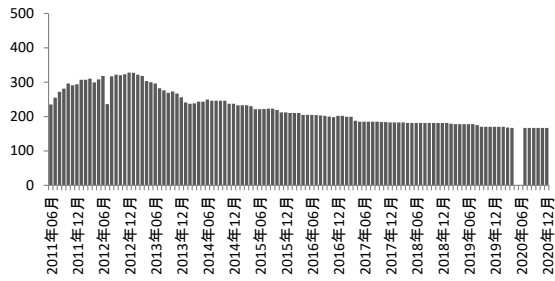
島根県



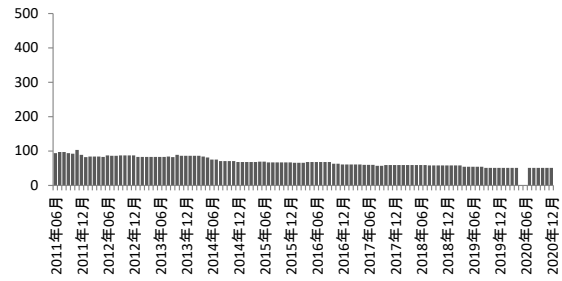
岡山県



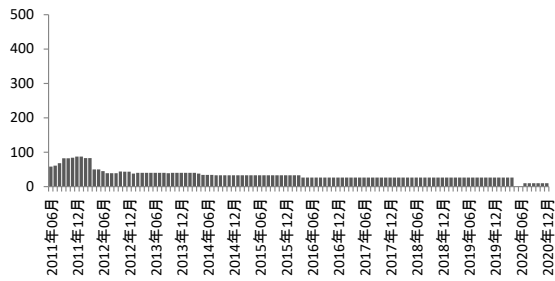
広島県



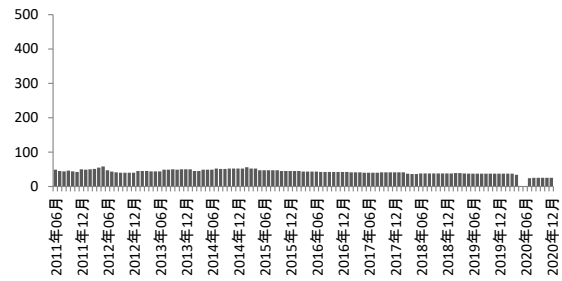
山口県



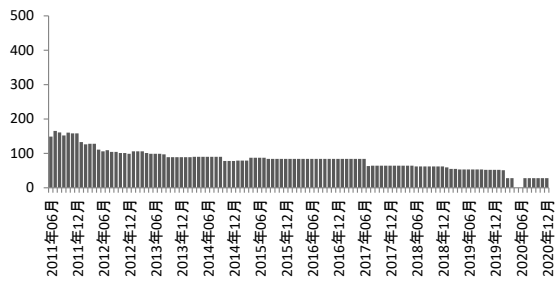
徳島県



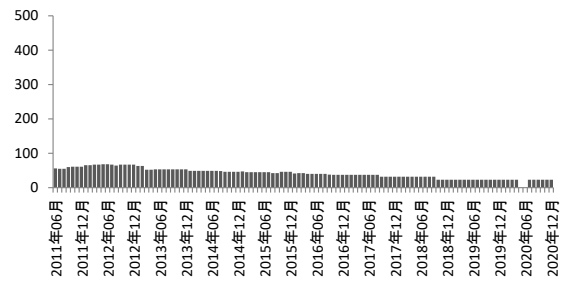
香川県



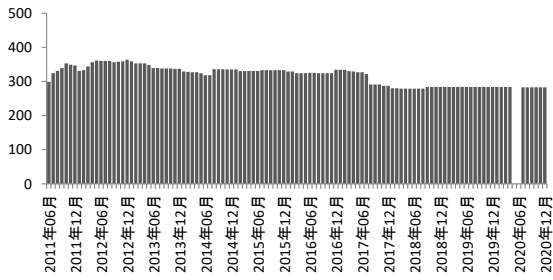
愛媛県



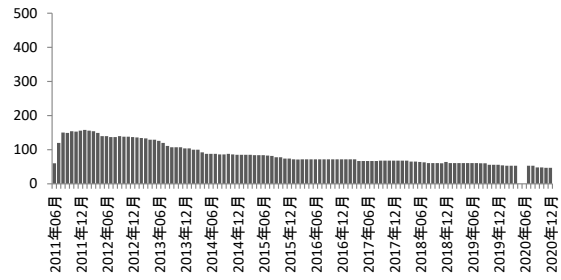
高知県



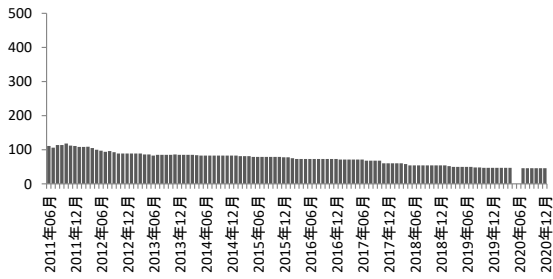
福岡県



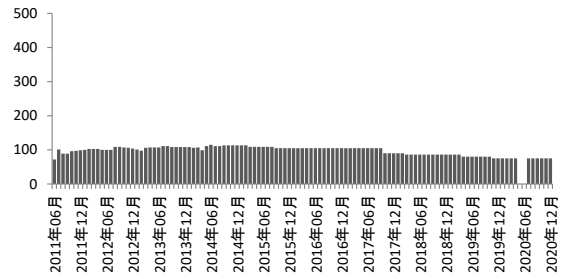
佐賀県



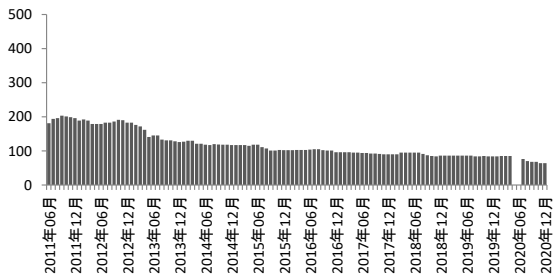
長崎県



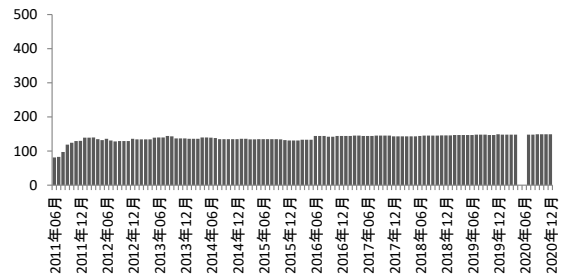
熊本県



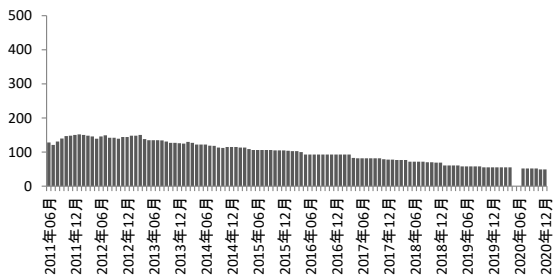
大分県



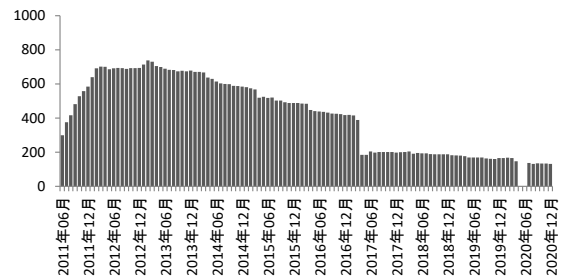
宮崎県



鹿児島県

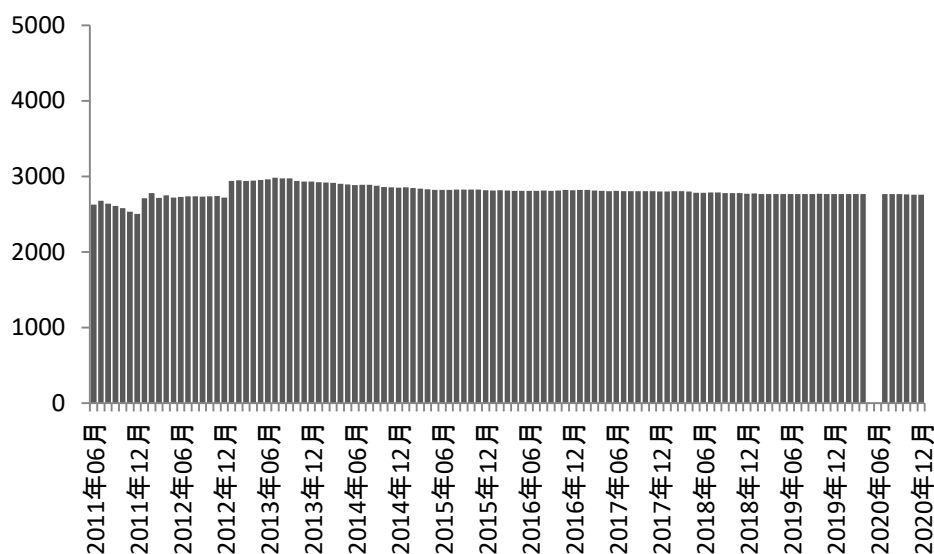


沖縄県



栃木県への避難者動向

- 栃木県への避難者数には増減数の変化が少なく定住化が進行している
- 全国に占める栃木県への避難者の割合 4.31%（2012年）→9.40%（2020年）上昇
- 北関東地方（茨城県・栃木県・群馬県）の全国比割合 13.1%→22.2%（上昇）
- 北関東地方における「栃木県」の割合 32.88%→42.38%（上昇）
- 栃木県への避難者数 2,710人（2012年）→2,756人（2020年）（微増）



福島県から栃木県への避難者数の推移（2011年6月～2020年12月）

全国における栃木県の動向

	避難者実数（人）			構成比（%）対全国避難者数		
	2012年1月	2020年12月	増減（人）	2012年1月	2020年12月	増減（%）
栃木県	2710	2756	46	4.31	9.40	5.09

北関東地方内における栃木県の動向

	避難者実数（人）			構成比（%）対北関東避難者数		
	2012年1月	2020年12月	増減（人）	2012年1月	2020年12月	増減（%）
茨城県	3,612	3,066	-546	43.82	47.15	3.33
栃木県	2,710	2,756	46	32.88	42.38	9.50
群馬県	1,921	681	-1,240	23.30	10.47	-12.83
地方総数	9,243	6,503	-1,740	100.00	100.00	
（全国）	62,808	29,307	-33,501			

第3部 栃木県への避難者を対象とした質問紙調査

—避難者の声をこれからの世代に伝えるために—

質問紙調査・基本統計

- 調査期間：2020年8月1日～20日
- 調査方法：質問紙調査，郵送配布・郵送回収法（1世帯当たり3部同封）
- 調査対象：430世帯対象＝（とちぎ暮らし応援会における福島からの避難者登録名簿）
- 回収率：13.48%
- 回答世帯数（58世帯）・回答者人数（102人）

基本統計【個人単位】回答総数：102人

	項目	人数	割合
性別	男性	50	49.0%
	女性	52	51.0%
年齢	30代以下	9	8.8%
	40代	21	20.6%
	50代	12	11.8%
	60代	26	25.5%
	70代	26	25.5%
	80代以上	8	7.8%

基本統計【世帯単位】回答総数：58世帯

	項目	世帯数	割合
避難区域種別	警戒区域	30	51.7%
	計画的避難区域	8	13.8%
	緊急時避難準備区域	11	19.0%
	指定なし	9	15.5%
罹災認定種別	全壊	5	8.8%
	大規模半壊	5	8.8%
	半壊	17	29.8%
	一部損壊	18	31.6%
	無被害	7	12.3%
	不明	5	8.8%
	無回答	1	—
避難年数	9～10年	41	70.7%
	7～8年	9	15.5%
	6年以下	9	15.5%

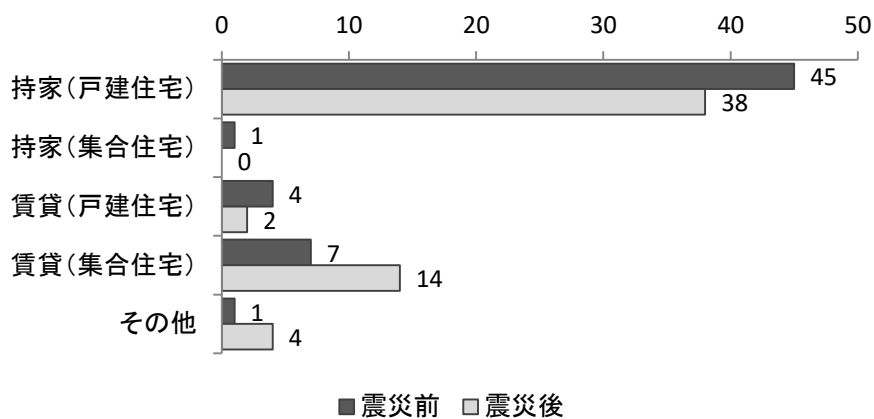
① 「震災前」と「現在」の住居

問 あなたの「震災前」と「現在」のお住まいについて、それぞれあてはまる「+」の箇所に一箇所ずつ○印を記入してください。

	持ち家 戸建住宅	持ち家 集合住宅	賃貸 戸建住宅	賃貸 集合住宅	復興公営 住宅	その他
震災前	+	+	+	+		+
現在	+	+	+	+	+	+

- 震災前後での持家率では、現在も比較的高いものの13.8ポイントの減少がみられた
- 震災前持家率（79.3%）→現在の持家率（65.5%）
- 震災前賃貸率（19.0%）→現在の賃貸率（27.5%）
- 賃貸（集合住宅）居住の割合の増加 震災前（12.1%）→現在（24.1%）

	震災前		現在	
	世帯数（世帯）	割合（%）	世帯数（世帯）	割合（%）
持家（戸建住宅）	45	77.6	38	65.5
持家（集合住宅）	1	1.7	0	0.0
賃貸（戸建住宅）	4	6.9	2	3.4
賃貸（集合住宅）	7	12.1	14	24.1
その他	1	1.7	4	6.9
合計	58	100.0	58	100.0



② 「避難拠点」と「生活居住拠点」の移動回数

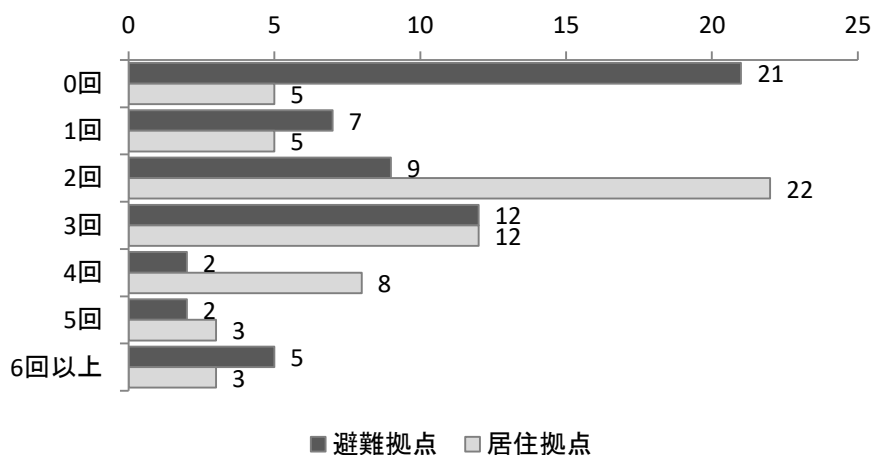
問 震災後から現在までにおいて、何回、避難拠点（避難所・避難施設等）とその後の生活居住拠点（住宅等）を移動しましたか？回数を記入して下さい。

避難拠点（避難所・避難施設等）	回
生活居住拠点（住宅等）	回

発災直後からの避難において、避難所や避難施設などの「避難拠点」を移動した回数では、回答世帯のうち18.9%が「5回以上」を経験。また、新たに住居など「生活拠点」を気付いてからも約半数の世帯が3回以上の引越しや居住地移動をしている。

この背景には、居住者世帯構成員の加齢や成長等に伴うライフステージの変化があるものと想定される。

	避難拠点		居住拠点	
	世帯数（世帯）	割合（%）	世帯数（世帯）	割合（%）
0回	21	—	5	—
1回	7	18.9	5	9.4
2回	9	24.3	22	41.5
3回	12	32.4	12	22.6
4回	2	5.4	8	15.1
5回	2	5.4	3	5.7
6回以上	5	13.5	3	5.7
合計	58	100.0	58	100.0

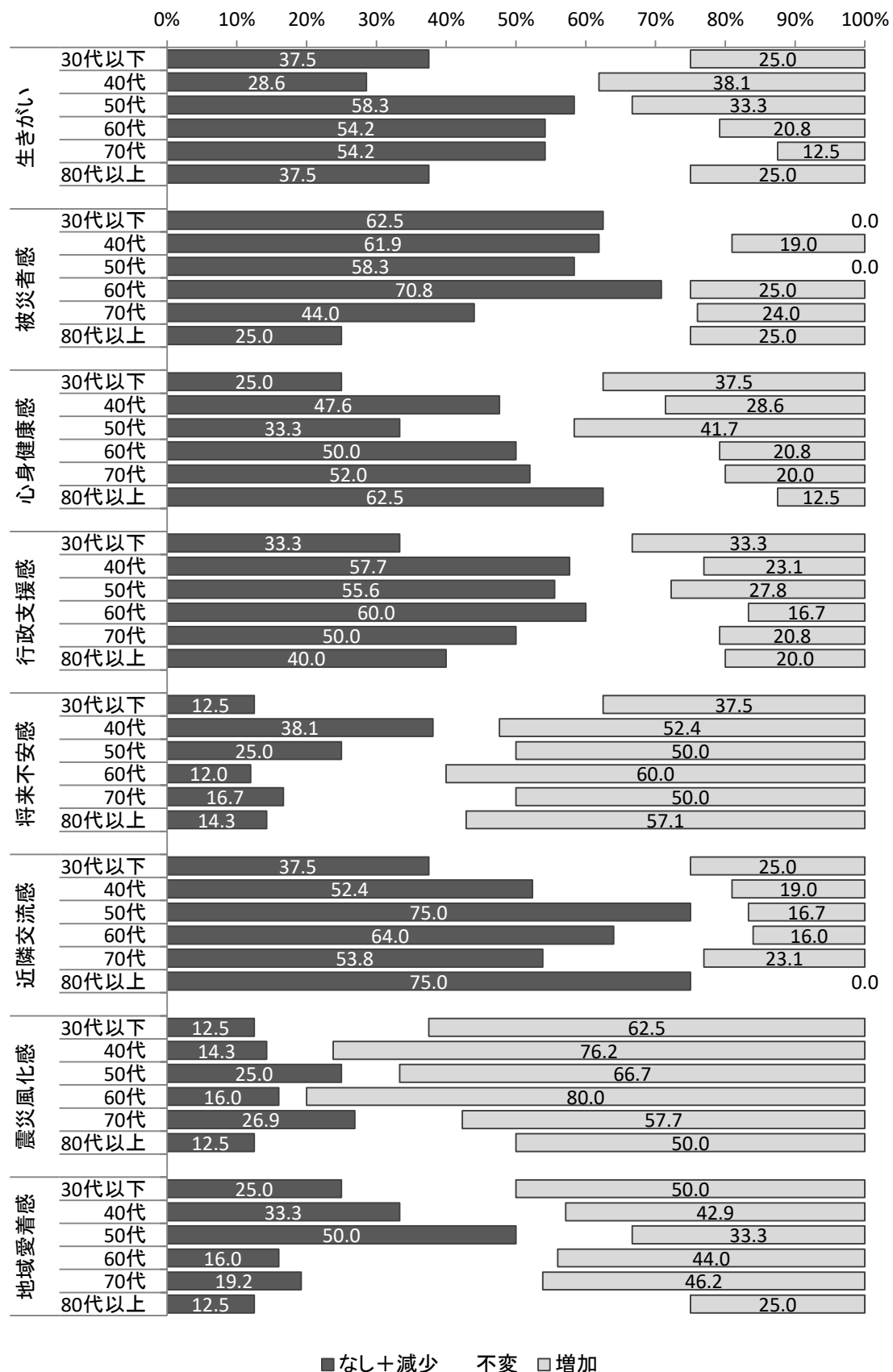


③ 震災発生から現在までの心の変化

問 下記の項目について、あなた自身の「震災」の発生から「現在」までの変化についてあてはまる「+」の箇所に○印をひとつずつ記入して下さい。

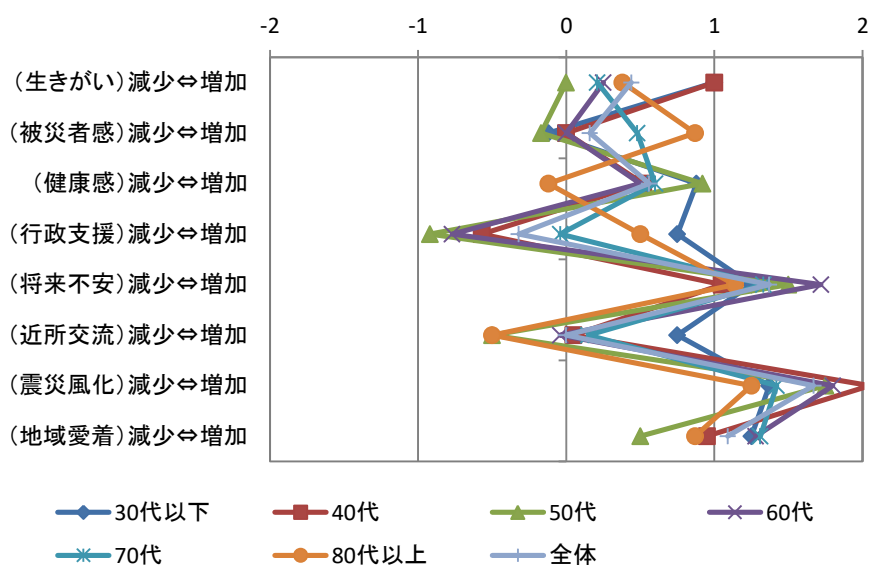
	ほとんどなくなった	とても減った	やや減った	変わらない	やや増えた	とても増えた
現在、生きがいを感じる事	+	+	+	+	+	+
現在、被災者であると感じる事	+	+	+	+	+	+
現在、心身が健康的であると感じる	+	+	+	+	+	+
現在の行政等からのサポート	+	+	+	+	+	+
将来に「不安」を感じる事	+	+	+	+	+	+
現在の近所付き合いや交流の度合い	+	+	+	+	+	+
現在、震災の「風化」を感じる事	+	+	+	+	+	+
現在住んでいる地域への愛着	+	+	+	+	+	+

- 「生きがい」：50代から70代において半数の割合で「なし+減少」
- 「被災者感」：30代から60代において「なし+減少」の割合が卓越
- 「心身健康感」：加齢に伴う健康感の減少
- 「行政支援感」：40代から70代において半数の割合で「なし+減少」
- 「将来不安感」：40代以上の全世代において半数以上の割合で不安感が「増加」
- 「近隣交流感」：40代以上の全世代において半数以上の割合で「なし+減少」
- 「震災風化感」：全年齢層で風化を実感している割合が高く、60代では80%を占めた
- 「地域愛着感」：全年齢層で概ね40~50%の「増加」傾向がみられた。

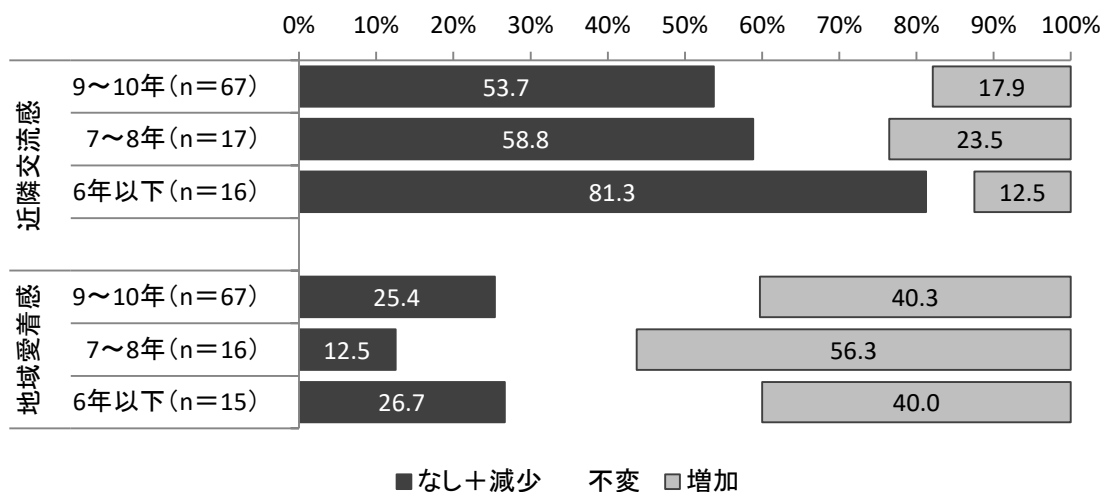


震災の発生から現在までの暮らしの変化等を年齢別で見ると、全年齢層に共通して「将来への不安」や「震災の風化」を感じる割合が高く挙げられた。しかし、80代以上の高齢者においては、依然として「被災者感」が高く「健康感」「近所との交流」が減少にとどまっている。一方で、「(現在住んでいる)地域への愛着」も徐々に得られ始めている。

栃木県への避難年数別における「近隣交流感」では、居住年数が短い避難者にとっては「なし+減少」の割合が高く、全避難年数においても「増加」の割合が少ない。



震災発生から現在までの気持ち・こころの変化 (年齢別)



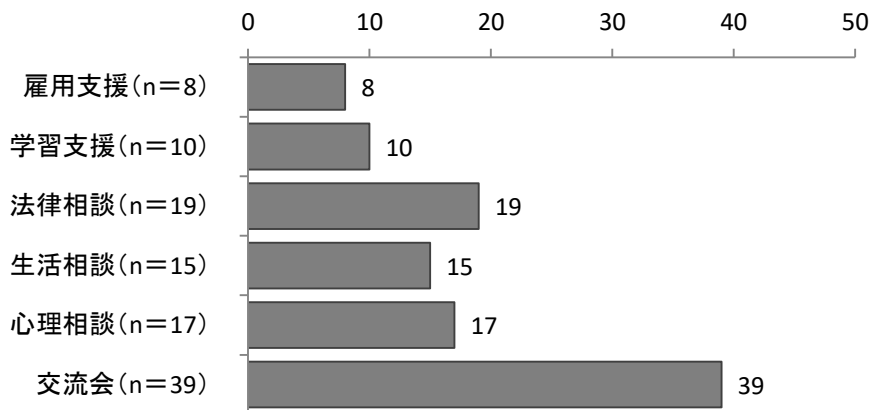
栃木県への避難年数別「近隣交流感」と「地域愛着感」

④ 震災後に利用した支援

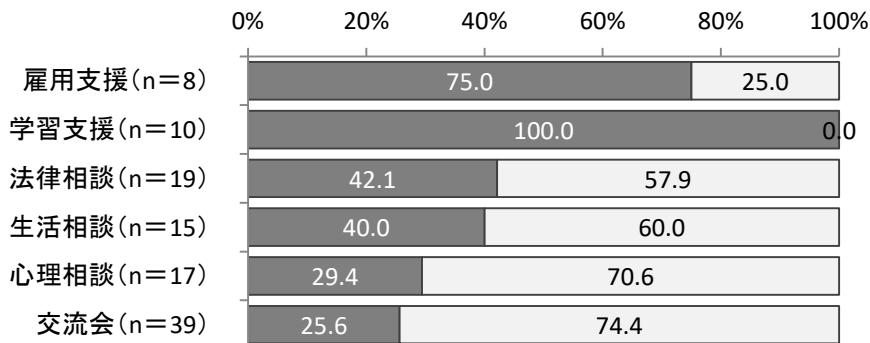
問 震災後の支援について、あなたご自身が利用・活用したものについてあてはまるものすべてに○印を記入して下さい。

- | | | |
|----------|------------|-----------|
| 1. 雇用の支援 | 2. 学習・教育支援 | 3. 法律相談 |
| 4. 生活相談 | 5. 心のケア・相談 | 6. 避難者交流会 |

被災後に支援団体等により実施された支援内容のうち主要 6 件に関する利用状況では、「交流会」が最も多く、次いで「法律相談」「心理相談（心の相談・ケア）」であった。50代以下と 60代以上の年齢区分でみた支援内容別の利用率では、50代以下において「(こども)学習支援」や「雇用支援」が利用された。しかし、同世代（50代以下）における「心理相談」や「交流会」の利用率は30%未満にとどまっている。



利用した支援内容（複数回答）



■ 50代以下 □ 60代以上

年代別・支援内容別の利用率

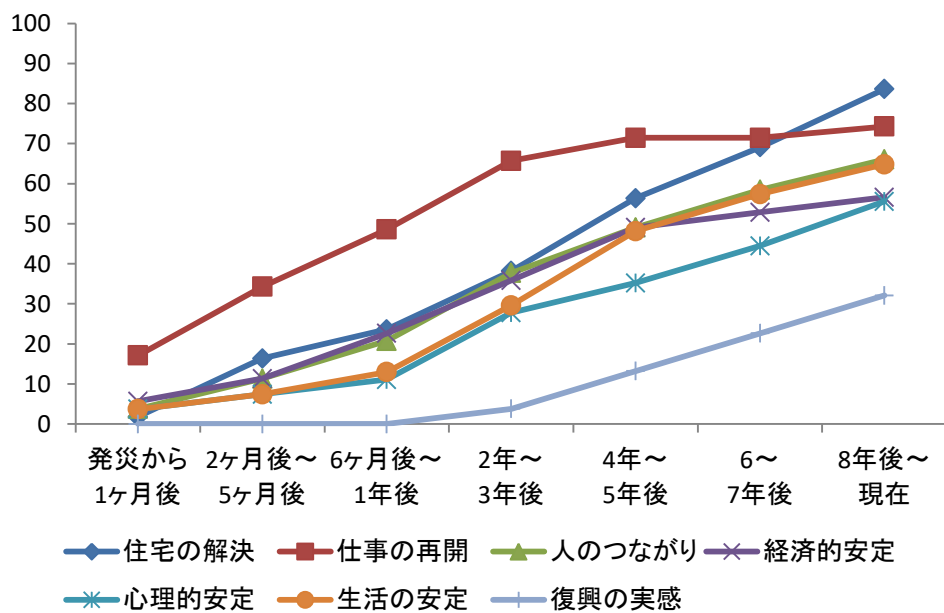
⑤ 生活復興感の推移

問 下記の項目に対してあなたの実感に当てはまる時期の「+」の箇所には○印をひとつずつ記入して下さい。

	発災から1か月後	2か月～5か月後	6か月～1年後	2年～3年後	4年～5年後	6年～7年後	8年後～現在	まだ解決していない
住まいの問題が一応解決した	+	+	+	+	+	+	+	+
仕事の再開のめどがついた時期	+	+	+	+	+	+	+	+
現住地での人のつながりの実感	+	+	+	+	+	+	+	+
経済的な落ち着きの実感の時期	+	+	+	+	+	+	+	+
こころの落ち着きの実感の時期	+	+	+	+	+	+	+	+
現住地での生活の落ち着き	+	+	+	+	+	+	+	+
震災からの復興を実感した時期	+	+	+	+	+	+	+	+

1995年の阪神・淡路大震災では、「都市再建」や「経済再建」に加え、被災者自身の「生活再建」が初めて復興の目標として掲げられた。しかし、まちなみを修復する都市再建や、停滞した経済活動の活性化とは異なる、多様な被災者ニーズが基礎となる「生活再建」を構成する項目については、震災検証における系統的なワークショップから得られた知見により、「生活再建7要素」として「すまい」「人と人とのつながり」「まち」「心とからだ」「そなえ」「暮らしむき」「行政とのかかわり」が整理された。

本調査ではこの要素を基盤としながら、さらに、災害発生からの現在までの時期において「実感が得られた時期」の回答を得ることでこれを累積し「生活復興感」の推移の検討を行った。発災後の生活復興感の変化の時期では「仕事の再建」が比較的早く、1年後までに約半数においてその実感が得られている。一方「心理的安定」や「復興の実感」の回復は遅く、現在においても引く割合にとどまっていることが明らかになった。



生活復興感の推移

年齢別・未解決者の割合

	40代以下	50代	60代	70代	80代以上
住宅の解決 (未解決者の割合)	10.7	50.0	13.0	8.3	14.3
仕事の再開 (未解決者の割合)	25.9	33.3	38.5	0.0	50.0
人のつながり (未解決者の割合)	31.0	50.0	45.5	29.2	33.3
経済的安定 (未解決者の割合)	55.6	25.0	40.9	21.7	16.7
心理的安定 (未解決者の割合)	35.7	58.3	56.5	41.7	28.6
生活の安定 (未解決者の割合)	31.0	58.3	40.9	25.0	28.6
復興の実感 (未解決者の割合)	71.4	75.0	71.4	75.0	66.7

※ 年齢別に各項目の回答者全数に占める「まだ解決していない」件数の割合を算出

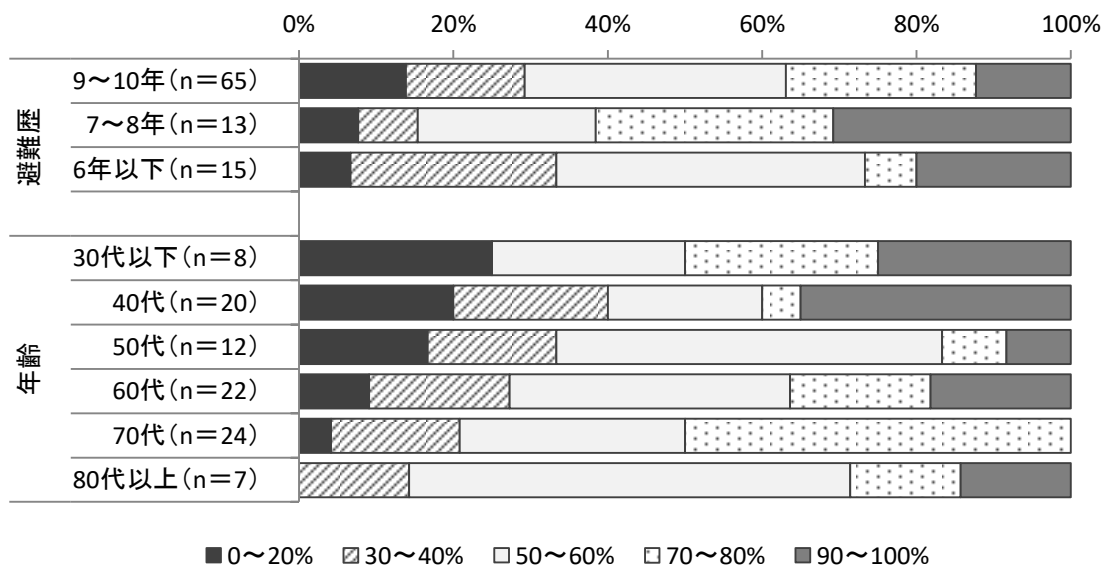
上図は、各項目について「まだ解決していない」回答の割合を、年齢別に示したものである。本図より、全年齢層において「復興の実感」は70%近くが得られておらず、また50代および60代において生活再建における未解決の内容が多いことが示された。

⑥ 現在の復興感の割合

問 あなたご自身の現在の生活は、「震災前」を100%としたときに、「現在」どのくらいまで回復していると思いますか？（〇はひとつ）

- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1. 0～20% | 2. 30～40% | 3. 50～60% |
| 4. 70～80% | 5. 90～100% | |

- 働き盛り世代にあたる30代、40代の「現在」の回復の割合では、高い復興感が得られている一方で、同年代の中には依然として復興を実感できていない割合がみられる。
- 復興感「0～20%」「30～40%」の割合は、加齢に伴い減少する傾向がみられた。
- 避難歴と「復興感」には必ずしも明確な差異はみられなかったが、「6年以下」および「9～10年」の避難者において、復興感が得られていない傾向がみられた。

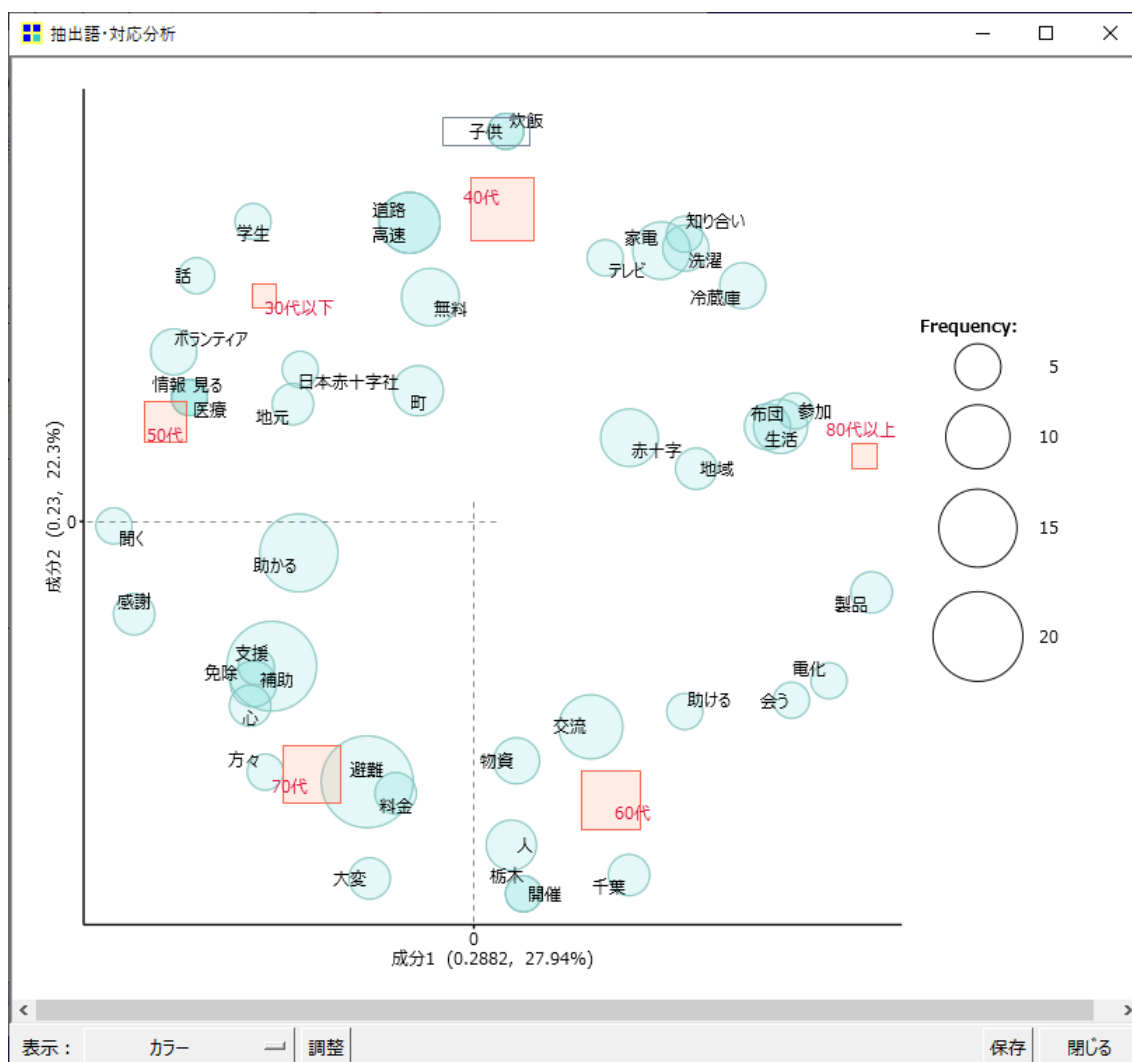


「避難歴」「年齢」別・現在の復興感割合

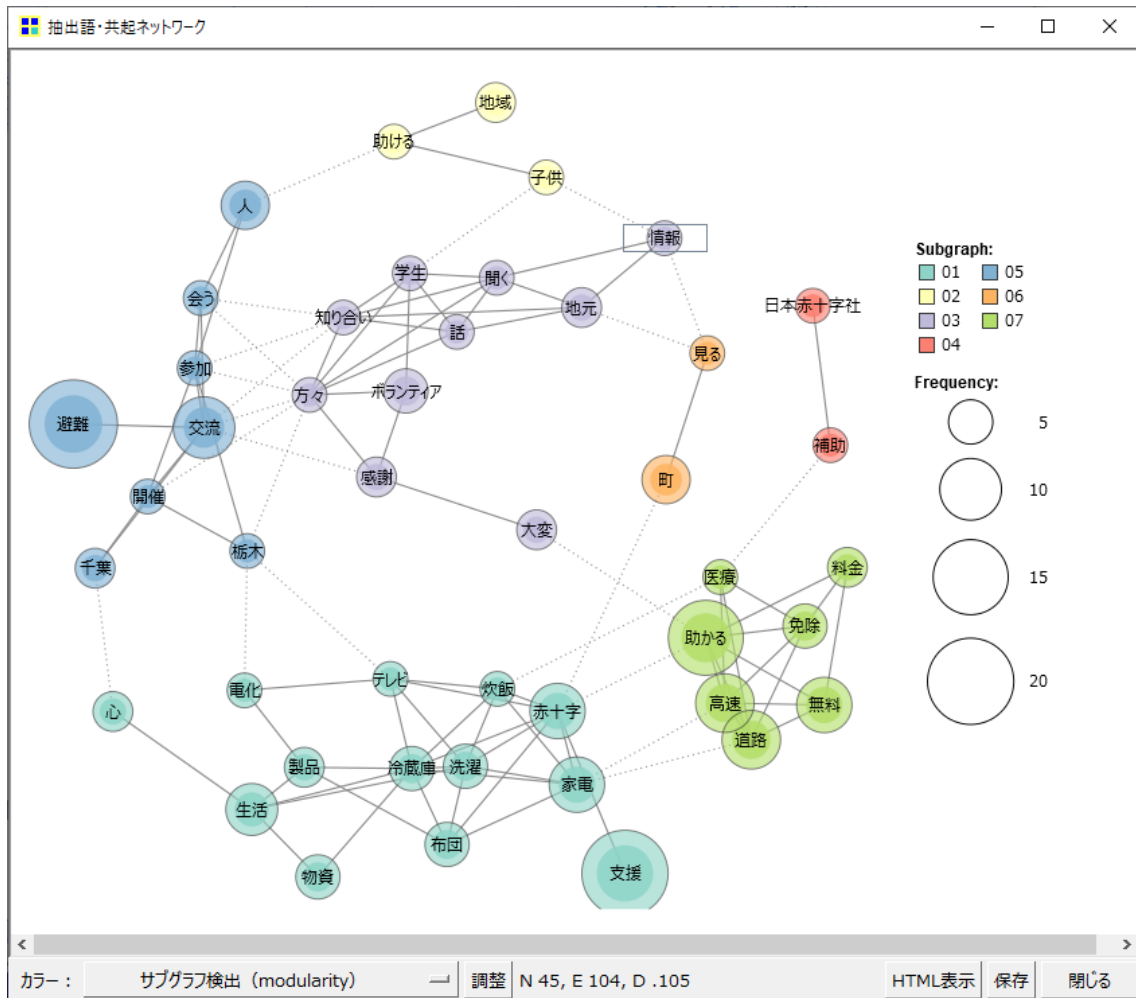
⑦ 助かったと思う支援の内容

問 震災後の支援について、支援金や補助金以外の支援について、「こんな支援がとても助かった」とおもうものをできるだけ具体的に記入して下さい。

全年齢層において生活再建における基盤を成す「電化製品」等の物的支援のほか、「高速道路の無料化」や「医療費」の「免除」「減免」等の資金面での支援が挙げられた。また60代、70代においては、「(避難者)交流会の開催」や、「心のケア」など、心理的支援が挙げられるなど、「物的・非物的」の両側面からの支援の重要性が示された。



「助かったと思う支援」対応分析結果



「助かったと思う支援」共起ネットワーク分析結果

	係り受け	品詞	品詞細分類	30代以下	40代	50代	60代	70代	80代以上
1	交流会+開催	名詞+名詞	サ変接続+サ変接続	0	0	0	2	1	0
2	高速道路+無料化	名詞+名詞	一般+一般	0	1	1	0	0	0
3	心+ケア	名詞+名詞	一般+一般	0	0	1	1	0	0
4	家電+支援	名詞+名詞	一般+サ変接続	0	2	0	0	0	0
5	赤十字社+家電	名詞+名詞	固有名詞+一般	0	2	0	0	0	0
6	洗濯機+炊飯器	名詞+名詞	サ変接続+一般	0	2	0	0	0	0
7	冷蔵庫+電子レンジ	名詞+名詞	一般+一般	0	1	0	0	0	1
8	炊飯器+テレビ	名詞+名詞	一般+一般	0	2	0	0	0	0
9	電子レンジ+洗濯機	名詞+名詞	一般+サ変接続	0	1	0	0	0	1
10	サポート+町	名詞+名詞	サ変接続+一般	0	1	0	0	1	0
11	洗濯機+生活用品	名詞+名詞	サ変接続+サ変接続	0	0	0	0	0	1
12	避難先+中学校	名詞+名詞	サ変接続+一般	0	0	1	0	0	0
13	イベント+誘い	名詞+名詞	一般+一般	0	0	0	1	0	0
14	イベント情報+チケット	名詞+名詞	一般+一般	0	1	0	0	0	0
15	生活物資+赤十字社	名詞+名詞	サ変接続+固有名詞	0	1	0	0	0	0

（「助かったと思う支援」記述内容・全記録）

- 栃木県からの電化製品（テレビ，エアコン，冷蔵庫等）の無料配布．浪江町役場からの救援物資の配布（60代）
- 避難先での物資，特に埼玉県加須市に行ったとき生活支援の物資が豊富でした．（60代）
- 避難先で手芸教室や料理教室での支援代替との交流会が開催され精神的に救われました．この時は千葉県千葉市に避難をしていました．（60代）
- 現在の居住地に移る前に千葉県千葉市に避難（生活居住拠点）しておりましたが，支援団体との交流会が毎週開催され本当に心が救われた思いがいたしました．（60代）
- 県外避難となってしまったので両親の介護等について，市の包括支援センターにお世話になることができ，支援していただいたこと．（70代）
- 故郷の情報を聞くことができ，大熊町の地元の絆が保たれていたこと．（70代）
- 避難先での衣食の支援が助かった．避難先自治体での上下水道料金の免除，施設の無料開放等．（70代）
- 減税措置，法律相談，地域の広報（60代）
- 避難者交流会．以前は知り合いではなかったのに，久々に地元の方と会えて，なつかしく地元の話をできたことがとってもよかった．（現在は，コロナで難しい）（40代）
- 生活雑貨品，各種電化製品（80代以上）
- 赤十字からの洗濯機が助かった．（70代）
- 茨城県や石川県に避難しているときはいろいろなイベントの誘いがあったが，栃木県に来てからはほとんどないのが残念（60代）
- 赤十字からいただいた電化製品等が大変助かりました．町からの食糧，食器，布団など（60代）
- 赤十字からの家電品，町からの台所用品や寝具等の支援はありがたかったです．（60代）
- 家賃補助，医療補助（70代）
- 家賃補助，日本赤十字社からの家電，高速道路無料（40代）
- 自転車や空気清浄機をいただくことができて助かりました．高速道路料金の無料化は助かりました．（40代）
- 高速道路無料化は助かりました．（40代）
- 赤十字からの援助はとても助かりました．（60代）
- 日本赤十字社からの支援（60代）
- 家電製品（冷蔵庫，電子レンジ，洗濯機），生活用品，布団類，食品（80代以上）
- 家電，米，バスタオル，布団（70代）
- 親類からの支援（こたつ，布団，掃除機，アイロンなど），日本赤十字（冷蔵庫，電子レンジ，洗濯機，炊飯器，テレビ，布団など）（40代）
- 親類からの服や雑貨の支援（50代）

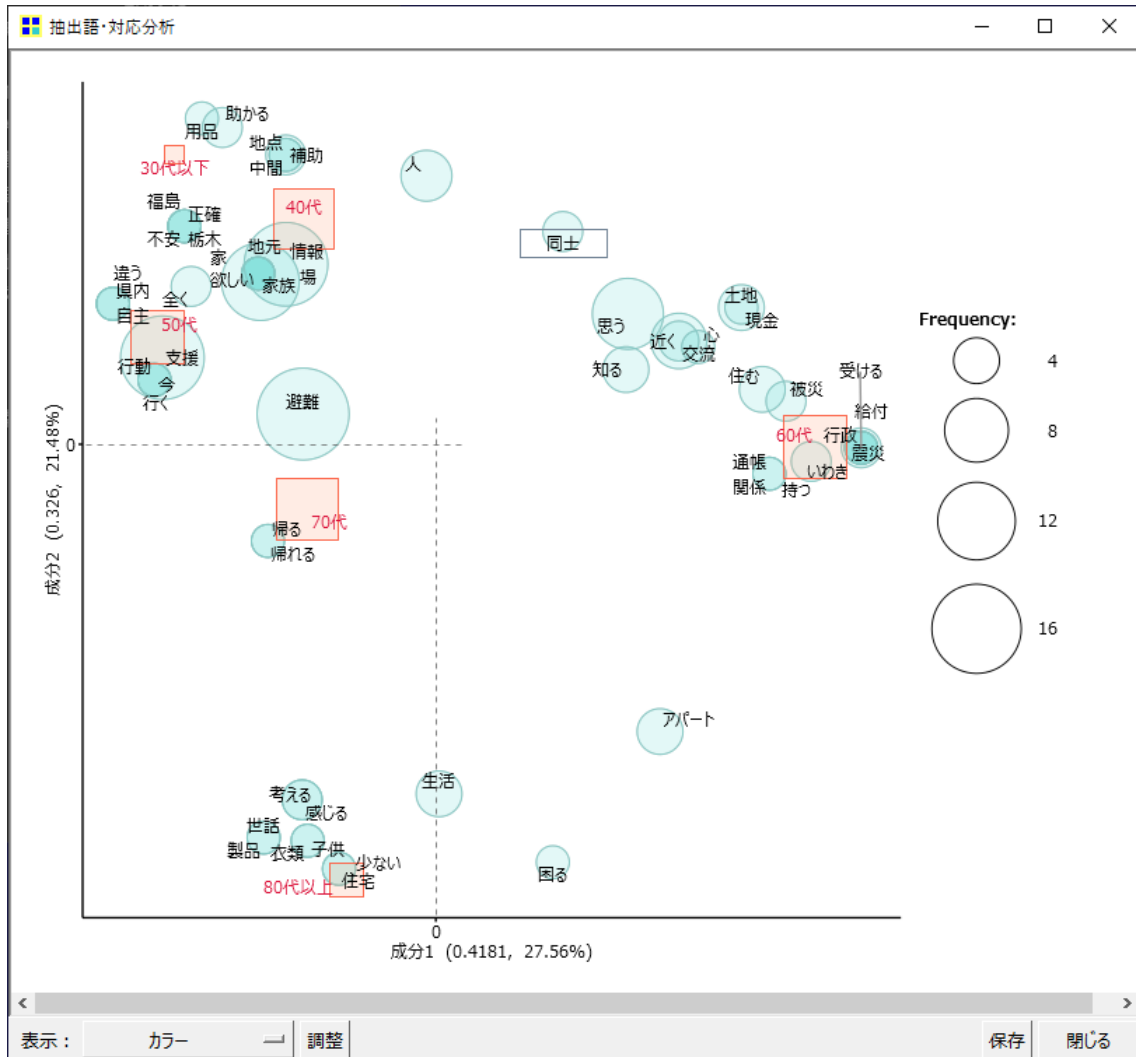
- 赤十字社からの家電の支援，子供の学費の支援，地域の方に受け入れていただいたこと，助けていただいたこと（40代）
- 高速道路料金の免除はとても助かった。（60代）
- 悩んで落ち込んでいた時に話を聞いてもらえたこと（50代）
- 避難者の交流会．参加しようと思うまでに3年かかったが，勇気を出して行ってみると，わかってくれる人がいてほっとした。（40代）
- 故郷の言葉で会話ができる交流会（70代）
- 温泉旅館でお風呂を提供していただいたこと．避難先の中学校で制服を用意していただいたこと。（50代）
- 避難所生活で学習することもままならなかったが，学生のボランティアの方が来てくださり，毎日勉強を教えていただくことができたことが本当にありがたく助かりました。（30代以下）
- 日本赤十字社からの支援物資は心を支えてくれる支援であり，そこからの生活の支援にもなった。（50代）
- 交流会に参加でき，知り合いに会うことが楽しみだった。（80代以上）
- 高速道路，医療費，国民保険，住民税の免除はとても助かりました．また，借り上げ住宅制度も助かりました．町からの生活物資，赤十字社からの家電（冷蔵庫，炊飯器，ポット，洗濯機）の支給もありがたかったです。（40代）
- 高速道路の無料化，住民税の軽減，家電セット（40代）
- 市内で避難者交流会が何度も行われ各地域の方と会うことができ，その方々の行動も参考になりました。（60代）
- 原発について全く関係ない町へ避難し，この地域で避難者に対しての見る目が強かった．こういう時にサポートできる町であればと思いました。（40代）
- 避難者住宅に入居中に，水道，下水道料金が免除になったことに大変助かりました。（70代）
- 避難した町での原発避難者に対する「福島ナンバー」の自動車に対する地元での見る目が強かった．もっとサポートできる町であればとおもう。（70代）
- 高速道路の無料通行（60代）
- 高速道路の無償化，医療費の免除，心のケア（50代）
- 震災前に住んでいたところのイベント情報やチケットを送ってもらえたこと．子供を連れて帰った際に，遊ぶ場所などがわからないのでありがたかった。（40代）
- 花火大会への招待（30代以下）
- とちぎボランティアネットワークでの情報誌を見るたびに，感謝をしています。（50代）
- 食器類，米（70代）
- 心のケア，相談の支援がありがたかった。（60代）
- 民生委員が訪問してくれたこと。（30代以下）

- 書類作成等を支援団体から受け、助かった。(70代)
- フードバンクで食品を支援していただいたこと。(70代)
- 高速道路の無料化が助かった。(50代)
- 土地勘も知り合いもない状況の中、ボランティアの方々が交流会等で話を聞いてくださり、ご尽力いただいたことに感謝をしています。学生さんたちによる学習支援もとてもありがたく感じました。(50代)
- 組内の人が声をかけていただき、みなさんと一緒だったので心強かったです。(80代以上)
- 地震保険に加入していたこと(70代)
- 宇都宮大学の学生による子供向けのクリスマス会などのボランティア活動がとてもうれしかったです。(40代)
- 日本赤十字の家電の支援(冷蔵庫,洗濯機,炊飯器,テレビ)(40代)
- 避難者交流会で大熊町の人たちと会うことができとてもよかった。知らない周囲の人たちには愚痴をこぼすこともできず、避難者同士で分かり合えることができた。矢吹町の社会福祉協議会の担当者さんには大変お世話になりとても感謝しています。(70代)
- フォレストアリーナで世話になりました。人と人とのつながりに助けられ、人の温かみにも助けられました。(60代)
- 多くの交流会が開催され参加した結果、知人の多くが当地方に避難されていることが分かり大変助かりました。栃木県の方々のボランティアに感謝します。(70代)
- 震災直後の食料や衣料など(40代)

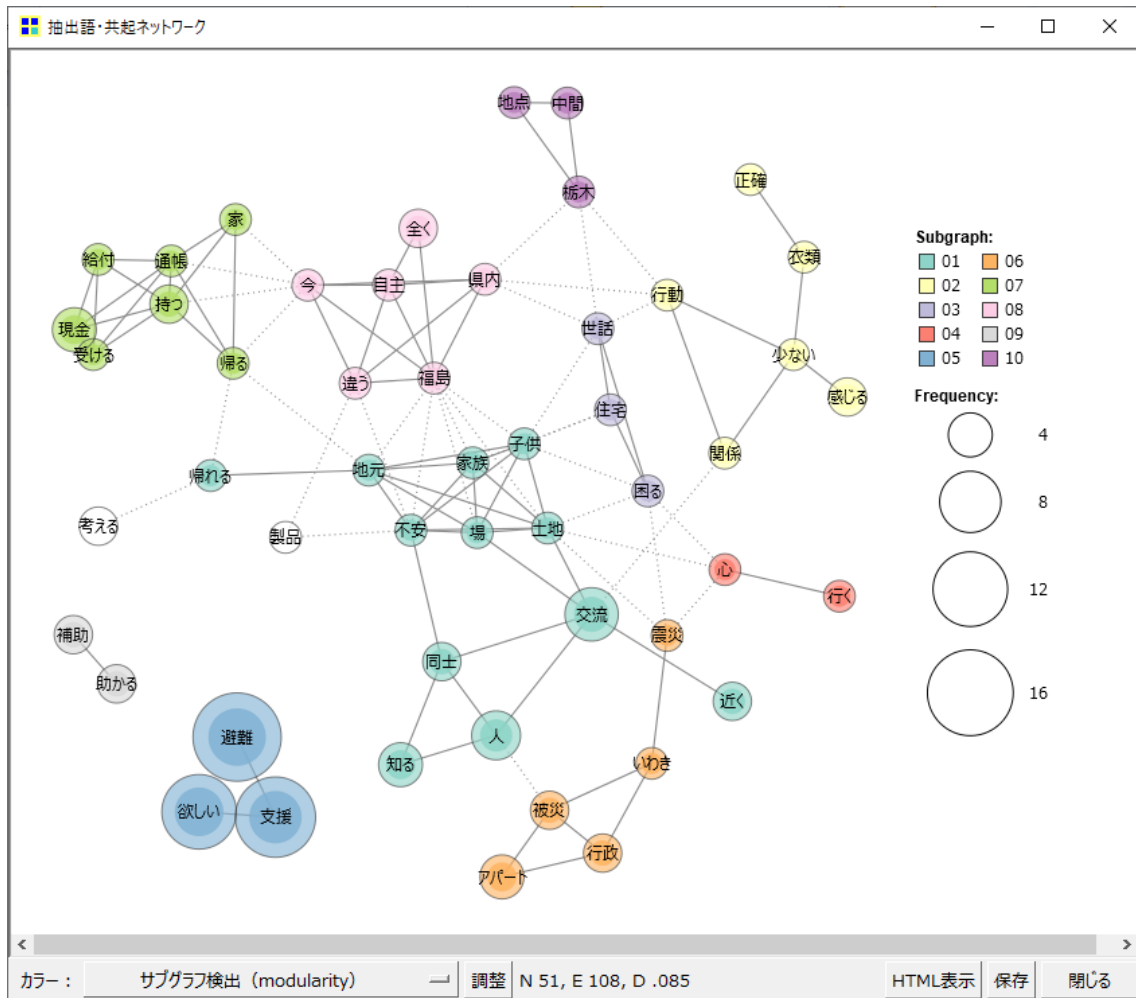
⑧ 必要だと思う支援の内容

問 震災後の支援について、「こんな支援が欲しかった」とおもうものをできるだけ具体的に記入して下さい。

避難当時の状況から、移転先での生活を行う上で「(初期の)現金支給」や、「引越し費用」などの資金面での支援枠組みの必要性が挙げられた。また、「地元(福島)」や「支援内容」に関する「情報」の提供支援が要されている。このほか、「自主避難者」における支援格差の課題も示された。



「必要だと思う支援」対応分析結果



「必要だと思う支援」共起ネットワーク分析結果

	係り受け	品詞	品詞細分類	30代以下	40代	50代	60代	70代	80代以上
1	情報+欲しい	名詞+形容詞	一般+自立	0	1	1	0	2	0
2	支援+欲しい	名詞+形容詞	サ変接続+自立	0	0	1	1	1	0
3	正確+情報	名詞+名詞	形容動詞語幹+一般	0	1	1	0	0	0
4	生活物資+支援	名詞+名詞	サ変接続+サ変接続	0	0	1	0	0	0
5	新しい+関係づくり	形容詞+名詞	自立+サ変接続	0	0	0	0	1	0
6	行政+支援	名詞+名詞	一般+サ変接続	0	0	0	1	0	0
7	避難先+家族ぐるみ	名詞+名詞	サ変接続+一般	0	1	0	0	0	0
8	避難+場所	名詞+名詞	サ変接続+一般	0	1	0	0	0	0
9	関係づくり+難しい	名詞+形容詞	サ変接続+自立	0	0	0	0	1	0
10	日帰り+大変	名詞+名詞	サ変接続+形容動詞語幹	0	1	0	0	0	0
11	同郷+人	名詞+名詞	一般+一般	0	0	0	1	0	0
12	宅地農地山林+管理	名詞+名詞	一般+サ変接続	0	0	0	1	0	0
13	いろいろ+援助	名詞+名詞	形容動詞語幹+サ変接続	0	0	0	1	0	0
14	間取り+無理	名詞+名詞	一般+形容動詞語幹	0	1	0	0	0	0
15	年寄り+関係づくり	名詞+名詞	一般+サ変接続	0	0	0	0	1	0

「必要だと思う支援」記述内容・全記録

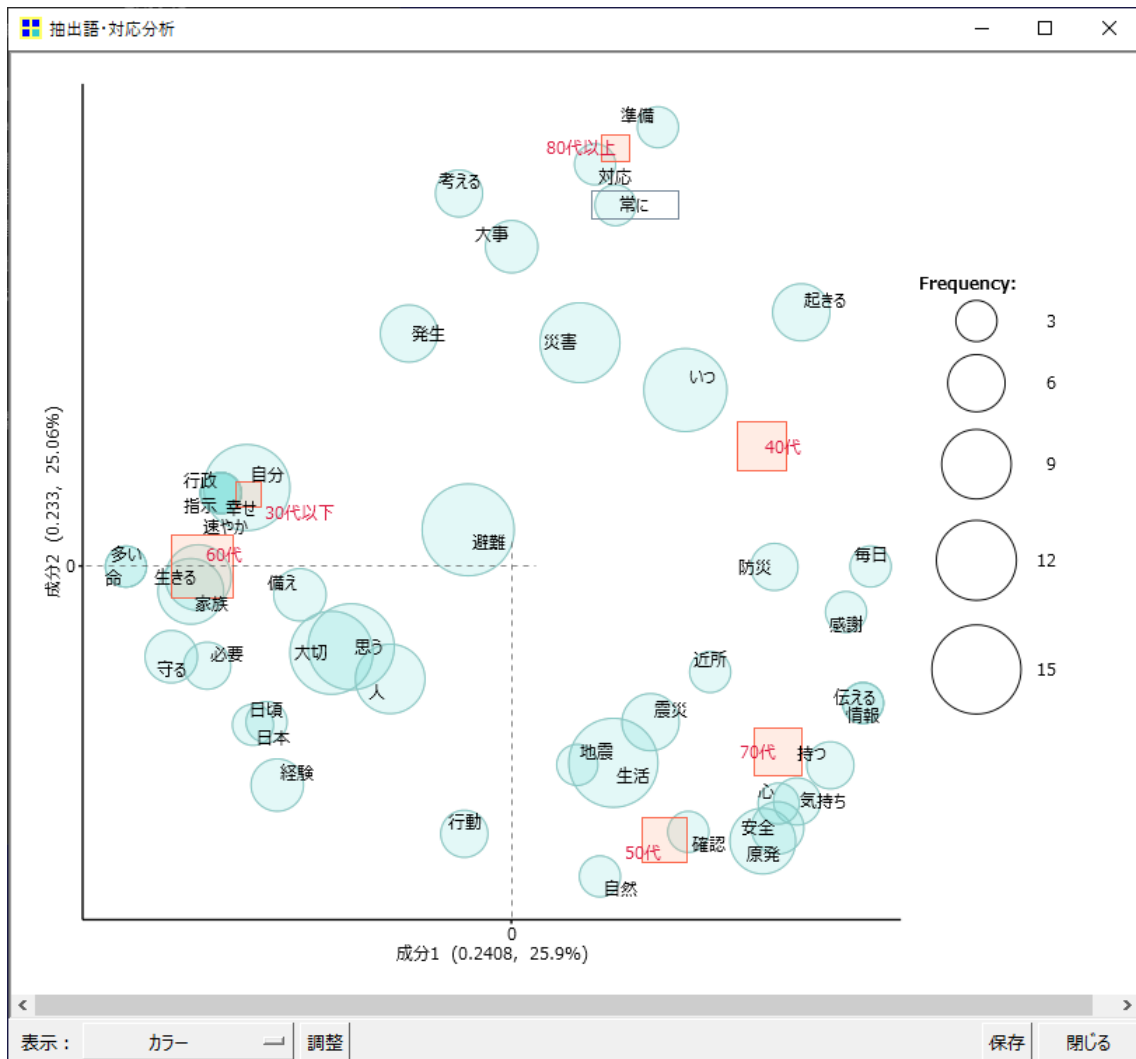
- 現金も僅かしか持たず、もちろん通帳も持たずに避難生活を強いられたので、今回のコロナ禍特別給付金のような一時的な現金給付が受けられていたらと思います。(60代)
- 震災から五か月後に、被災地の檜葉町からいわき市に移りましたが、その時に私は千葉に避難していましたので、いわき市に住居を移す必要がありアパートを探しましたが空きがなく苦勞しました。行政の支援が欲しかった。(60代)
- 個人情報の関係で同じ被災者同士が近所に住んでいてもそれを行政から知らせていただくことがなかった(後日、アパートの大家さんから同郷の人が近くに住んでいるとの情報を得たが特定はできなかった)。もし、知り合うことができればお互い交流し、助け合うこともできたと思う。(60代)
- 地元に戻りたくても帰れない気持ちがいまだに続いている。どちらかひとつに落ち着いて生活できる日が欲しい。いまだ10年たっても帰れる当てもない身になって国も考えてもらいたい。(70代)
- アパートに居住していたが、衣類等の案内が一回なので購入がほとんどだった、生活支援が避難施設より少ないと感じた。(80代以上)
- 2~3日で家に帰ることができると思い、所持金と通帳だけは持ってきたので…今思えば衣料が欲しかった。一番は、情報が欲しかったです。無我夢中でどこで支援しているのかも知らなかった。(70代)
- 高速道路無料区間が中間地点にもあるとよかった。父に会うのに連休のない夫は栃木までの日帰りが大変になっていたため、中間地点的那須インターで合流できればもっと会えたのになと思っていました。(40代)
- 安い家賃のアパートは治安や間取りが悪く補助範囲では無理でした。全部ではなくとも、一部だけでも補助していただくと助かりました。(40代)
- 引越し費用補助があれば助かると思います。(40代)
- 同じ町内に住んでいたが避難する場所によって支援の差を感じている。(40代)
- 避難所を利用しなかったため、いろいろな援助が受けられなかったように思う。(60代)
- 電化製品、ガスコンロ(80代以上)
- 正確な情報が欲しい。衣類などはもう少し考えて支援をしてほしい。(40代)
- 統一された情報が欲しい(50代)
- 食品、日用品(40代)
- 行政に関わった方々はみなさん一生懸命手を差し伸べてくださったこと感謝をしています。(60代)
- 避難直後、団体行動ができず、親類宅で世話になっていたころ、栃木県内での支援情報が最もわからずにいました。細かい情報をもっと早く伝えてほしかったです。(50代)
- 速やかな避難対応と正確な情報(50代)

- 住宅支援，家族が別々にならずに住めるような配慮が欲しかった。(70代)
- 避難所に行った人だけでなく，被災者全体に対して心の支援が欲しかった。(50代)
- 避難した原因等すべての情報がほしかった。(40代)
- 住んでいたところの復興状況等についての情報が欲しかったです。(70代)
- 県外避難者に関する情報が全くなかった。(70代)
- ペットを飼っている家庭へのエサやトイレ用品の支援があると助かった。(30代以下)
- 震災前の集落単位の交流会の開催により，心のケアの相談の実施をして浪江町の家屋，土地（宅地・農地・山林）の管理について困っているための話し合いをお願いしたい。(60代)
- 学習支援が欲しかった(30代以下)
- 家の近くの職場を紹介してほしかった。(40代)
- 避難者交流の場が近くにあるとよかったとおもう。(70代)
- 病院に行くための支援が欲しかった。交通が不便だった。(70代)
- 自主避難のため，支援をあまり頼らず今があるが，同じ福島県内でも支援が全く違うこと，自主避難者にはとても冷たいと思う。(50代)
- 生活物資の支援（布団・家電製品等）はありがたかったのですが，自治体によって配られるものが違ったりするので，平等性に欠け，そのため，避難者同士で軋轢が生じることもありました。ものも大事ですが，情報が行き届いていないことも不安を抱える要因になったので，情報の発信を積極的にしてほしかったです。(50代)
- 私は，子供たちのところに来て世話になったのであまり考えなかったのですが，借り上げ住宅に入ってからいろいろ不自由なことがあって困りました。(80代以上)
- 避難するとき少しでも多くの地域住民と行動ができ，コミュニティを最低限保つことができるように，日頃からの交流ができれば孤独を感じるものが少なくて済むとおもう。年寄りの新しい関係づくりは難しいと思う。(70代)
- 避難先での家族ぐるみの交流の場。知らない土地で地元のことを聞ける人か，情報交換できる人が全くいなくて，とても不安だった（子供の転校先に福島から避難された人がいたようなので，親同士，挨拶くらいできたら心強いなと思ったけれど，どうつながったらよいかわからず，交流することはできなかった）(40代)
- 知らない街に移り住み，知人もいないときに社会福祉協議会の方に自宅まで訪ねていただいたときはとてもホッとした思いがありました。(70代)
- 現金がなかったので現金が欲しかった。(40代)

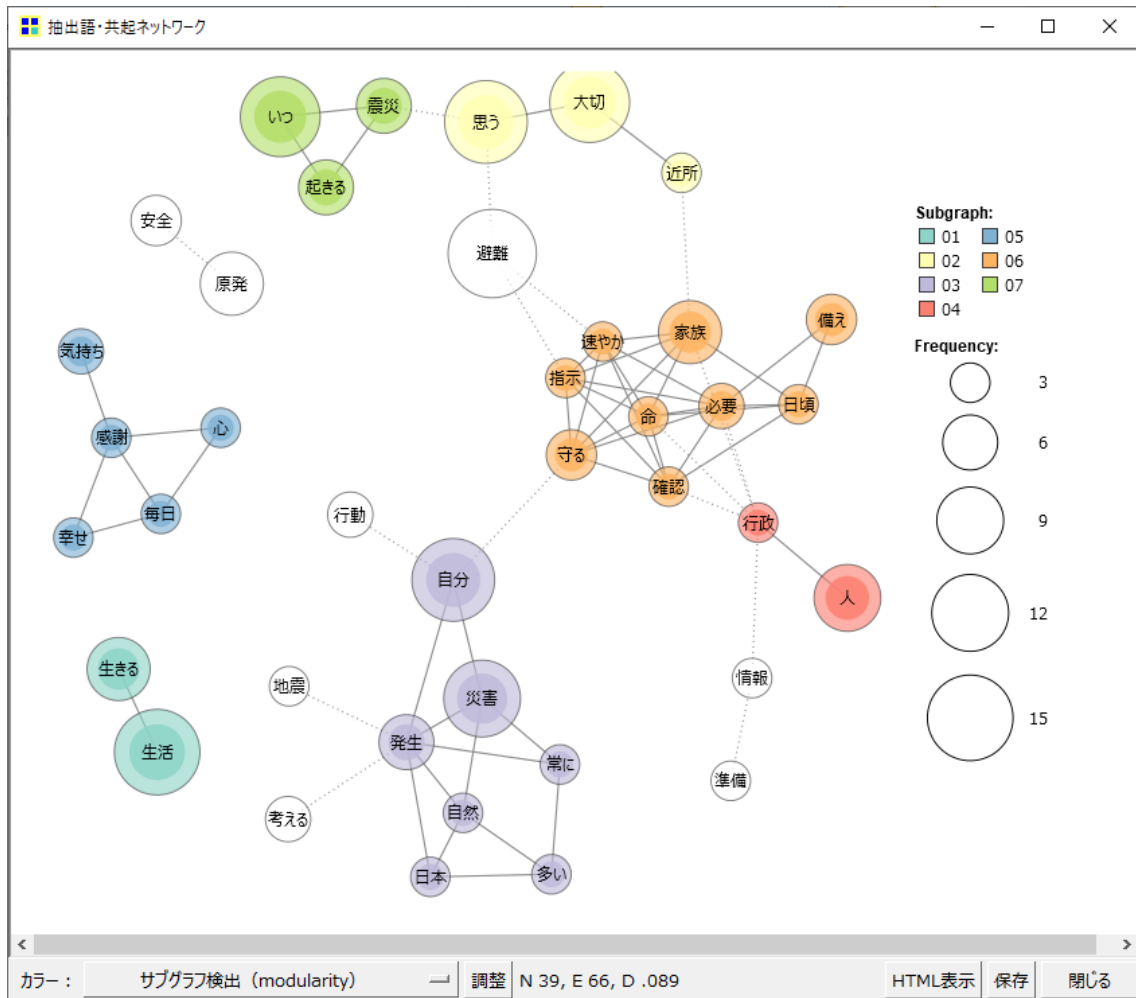
⑨ これからの世代に伝えたいこと

問 東日本大震災の経験を通して、あなたがこれからの世代に「伝えたい」とおもう、メッセージや教訓は何ですか？できるだけ具体的にご記入ください。

全年齢層に共通して災害時の「避難」の大切さが挙げられたほか、「絶対的な安全はない」ことや、自然災害が「いつ発生してもおかしくない」という心構えをもつことの重要性が示された。また、「日々の生活への感謝」「日頃の備え」「自分の身は自分で守る」ことが大切であり、日頃からの、近隣や友人等とのコミュニケーションが重要である旨が示された。



「これからの世代に伝えたいこと」対応分析結果



「これからの世に伝えたいこと」共起ネットワーク分析結果

	係り受け	品詞	品詞細分類	30代以下	40代	50代	60代	70代	80代以上
1	いつ+発生	名詞+名詞	副詞可能+サ変接続	0	0	1	2	0	0
2	自分+行動	名詞+名詞	一般+サ変接続	1	0	0	0	1	0
3	避難指示+発出	名詞+名詞	サ変接続+サ変接続	0	0	0	2	0	0
4	災害+発生	名詞+名詞	一般+サ変接続	0	0	0	2	0	0
5	発出+避難	名詞+名詞	サ変接続+サ変接続	0	0	0	2	0	0
6	備え+必要	名詞+名詞	一般+形容動詞語幹	0	0	0	1	1	0
7	毎日+生活	名詞+名詞	固有名詞+サ変接続	0	1	0	0	1	0
8	自分+命	名詞+名詞	一般+一般	0	0	0	2	0	0
9	速やか+避難	名詞+名詞	形容動詞語幹+サ変接続	0	0	0	2	0	0
10	自然災害+発生	名詞+名詞	形容動詞語幹+サ変接続	0	0	1	1	0	0
11	知識+経験	名詞+名詞	一般+サ変接続	0	0	1	0	0	0
12	家族+健康	名詞+名詞	一般+形容動詞語幹	0	1	0	0	0	0
13	家族+親しい	名詞+形容詞	一般+自立	0	0	0	0	1	0
14	最近+経験	名詞+名詞	副詞可能+サ変接続	0	0	0	1	0	0
15	日々+健康づくり	名詞+名詞	副詞可能+形容動詞語幹	0	0	0	1	0	0

（「これからの世代に伝えたいこと」記述内容：全記録）

- 最近は自然災害が多く発生し、甚大な被害を日本各地で経験しています。「明日は我が身、常に危機感をもって生活すること」（60代）
- 今までのことをいつまでの考えず、前向きに生きることです。（60代）
- 避難指示が発出されたら速やかに避難し、決して自宅に戻ったりしないことが命を守るために大切なことです。それぞれが自分の命を守る行動をとること、家族できちんと話し合っておくことが大切。（60代）
- 自分だけ、自分の家族だけは災害に遭遇することはないとは思えないでほしい。いつ災害が発生しても数日自分を守ることができる備えは必要だと思います。また、行政より避難指示が発出されたら、速やかに避難し、家族が避難したかどうか等確認のために自宅に戻ったりしないことが自分の命を守るために必要です。家族とは落ち合う場所を日頃より話し合っておくことも必要です。（60代）
- 震災はいつ起きてもおかしくない所以对する備えが必要。原発は、地域住民に安定した生活をもたらしたが、これだけ大変なことになり、先祖代々伝わった土地を離れて生活しなければならない悲しさ、胸の奥のモヤモヤが消えることはない。今となれば、原発は反対を言いたい。（70代）
- 原発の恐ろしさが身にしみてわかった。安心安全の神話は当てにならなかったのだから、この思いを原発地元民には味わせたくない。（70代）
- 災害時における避難先の確認。非常時の持ち出し物の確認（70代）
- 天災はいつどこへやってくるかわからない。人の言う「安全」を信じてはいけない。（40代）
- 津波被害を受けた土地には住宅は建てさせないよう条例等で定める。災害は繰り返される。（80代以上）
- 支援情報、市単位、県単位で相談するところがわからなかった。避難所を出た後の情報の手助けをいただくと助かります。（70代）
- 何があっても楽しく生活すること、前向きに生きることの大事さを学んだような気がします（60代）
- 一人でも力強く生きられる人。家族ぐるみで動ける人は大丈夫でしょうが、一人ではうまく生きられない人は黙っていないで遠慮しないで行政に声を発したらよいと思います。（60代）
- 原発の安全は「神話」であったこと。（50代）
- 毎日の平凡な生活がとても幸せなものだったと気づきました。不平不満ばかり言うのではなく家族が健康でいられること、生活できること、働けることへの感謝の気持ちに少し変わりました。（40代）
- いつ何が起きても不思議ではないこと。その出来事から少しずつ克服して生活を戻せ

ること。(40代)

- 親類の付き合い，近所の付き合いを大切にしてほしい。家族は大切だがそのほかのつながりがなければ人生は楽しくない。(60代)
- 行政や他の人を当てにしてはならない。考え方も含めて自分自身で考え準備していく。また情報の精査をしていく。(40代)
- 原発の近くには住まないこと(60代)
- 国内の災害が発生時に数多くの項目のニュースが流れますが，自分に合わせて検討し，対応方法を考え得るだけの準備を常に行うようにすること。(80代以上)
- 日頃の備えが一番。日々の健康づくり，日頃からのネットワークの充実を重ねていくこと(60代)
- いつ震災が起きるかわからないので備えは大切だと思う。(40代)
- 科学に安全はないが，人間の使い方によっては安全は高めることができるかもしれない。(50代)
- 震災はいつどこで起きてもおかしくないので，定期的に防災用品の見直しや避難について考える機会があればよいと思います。(40代)
- いつ何があるかわからない。これからの世の中も，決して他人事とは思わず，何事も自分に当てはめてシミュレーションすることが大事だと感じています。(60代)
- 脱原発(50代)
- この世の中，いつ何が起きても動じない強い心と後悔のない毎日を送ること。一日一日を大切に感謝して生きること。(40代)
- 災害は想定できない。災害時に自分で行動できるように常に備えておくべき。(70代)
- 日頃から家族，親しい友人，親類や近所の方とのコミュニケーションを大切に生活をしていくこと，趣味を持つことが非常に大切だと思う。(70代)
- 人は人によって救われる。感謝の気持ちを忘れない。自分勝手な行動は体育館などの避難所では控える。(50代)
- 避難先を転々として知り合いもおらず，人間関係を築いていくことがとても大変だったので，自分から発信し，意見を述べるなど自分から積極的に行動し，臨機応変に対応する力をつけていくことが大切だと思う。(30代以下)
- 相手の気持ちになって接していくこと。(50代)
- 避難指示が出たら速やかに従うこと，絶対に過信しないこと。(40代)
- 家のものをどれほど手に入れても，一瞬で失われることがあります。目に見えるものに期待するのではなく，永続する何かを見つけてください。(40代)
- 防災訓練や，周囲の人との交流の大切にすること。ひとは一人では生きていけない。便利な生活が多ければ多いほど災害が起こると不便になってしまうということ。(60代)
- 強い精神力を持つことが大切だと思う。(40代)
- 地震が起こった時に，赤ちゃんを連れていて，近所の人にとっても助けてもらった。住

んでいる周りの人との関りは、日頃から大切にすべきだと思う。(40代)

- 日本で生活をしている以上、被災の可能性はあります。備えはしっかりしておいて、あまり怖がらないで生きていきましょう。(30代以下)
- いまできることをきちんとやる(50代)
- 震災による語り部を数多くすることにより、避難経験を社会に伝承することが大切だと思います。(60代)
- 防災グッズ、食料の備蓄をしておいたほうがよい。(70代)
- 原発の恐ろしさや放射能問題を伝えたい。(70代)
- 毎日普通に生活できることは奇跡なんだよね。震災前の若かったころ、風呂に入って「あ〜今日も幸せ」と思っていた。幸せってすぐそばにあるんだよねって思っていたけれど。いま、普通に生活できるように見えるけれど、何かが違うんだよね。(60代)
- 放射能の不安で避難をしました。当時は「福島」というだけで子供がいじめにあったり、福島ナンバーの車ということで車に傷をつけられたりしました。数年間とてもつらい思いをしながら生活をしましたが、このような経験をした当事者でないと理解してもらえないだろうとおもいます。まずは、大人が避難者に対して寄り添う心を持ち、その姿を見て子供たちが学んでいくのではないのでしょうか。思いやりの心がお互いに大切だと思います。(50代)
- 日本は地震大国の上、温暖化によりいつどこで自然災害が発生してもおかしくない状態なので、東日本大震災を他人事としないでほしいです。最近になって、震災関連の映画も上映されるようになったので、3月11日だけに限らず風化させないことが大事だと思います。(50代)
- 自分の身は自分で守る。偶然や奇跡はなく、知識と経験で乗り越えるチカラをつけること。(50代)
- いつ何が起きるかわからないので、その時のために準備をしておくことです。避難所などを調べておくことが大事です。(80代以上)
- ひとひとりでは生きられないこと、モノの執着より生き方を工夫。生活を楽しむようにする。いつでも生きがいを見つけること(70代)
- 毎日の生活が変わりなく過ごすことができることがどんなに幸福であるかを伝えたい。(70代)
- 大きな地震の怖さ、大きな津波の怖さを経験して生き残っている自分です。いつ災害が発生するかもしれないゆえ、発展ばかりでなく、原点を見つめなおしてほしいと感じています。(60代)
- 自然災害はどこにいても発生するし、お互い協力し合う気持ちを持ち、助け合いの精神を発揮しましょう(70代)
- 過去の話やここは大丈夫ということは絶対がない。避難も迅速かつ最大限の対応を伝えたい。(40代)

第4部 栃木県への避難者を対象とした聞き取り調査

－あの日から今まで、これから－

① 被災者・避難者ヒアリング調査

対象	O氏ご夫妻 夫：震災当時 55 歳（現在 65 歳） 妻：震災当時 54 歳（現在 64 歳）
震災当時居住地	福島県富岡町
現住地	栃木県那須塩原市

● 2011年3月11日の「あの時」からの避難生活

2011年3月11日は、親族（娘）の引越しの手伝いのため、早朝5時に福島県富岡町を出発し、埼玉県まで自動車移動。埼玉県古河市に向かう途中で地震が発生。国道6号線は津波で通行止めになるかとの想定で、国道4号線に乗って富岡町に向かったが、途中で6号線からの自動車も合流し道路は大渋滞。結局、11日には富岡町までは帰着できず、12日の朝8時に須賀川市に到着。

コンビニエンスストアにはすでにほとんど物がなかったが、同店で支援物資としてパンを2個もらったことがとても助かった。同地から富岡町まで向かったが、檜葉町まで行ったところで警察に「ここから先に入れない」と告げられ、そこで指示された避難先の川内村に向かって移動し、12日の昼過ぎに、福島県川内村到着。村内の学校などの避難所は満員だったため、「かわうちの湯（温泉）」に避難した。同所では、暖房が効いていたのでとても助かった。

14日まで「かわうちの湯」に、15日から16日まで「川内小学校」に避難した。16日の朝から今度は、福島県郡山市のビッグパレットへ移動した。当時ビッグパレットには2700人ほどが避難をしていた。

ビッグパレットには、7月末までの約4か月間避難生活をした。7月末にビッグパレットを出て郡山市の静町のアパートに引越しをした。アパートを探すのには苦労をしたが、郡山市には富岡町の役場機能があったことから同市へ引越しをした。しかし、これまで「アパート」に住んだことがなく、また当時は仕事がなかったことから、目標や生きがいがなく、とてもストレスがたまった。

● 栃木県那須塩原市へ

郡山市のアパートに住み始めてから、仕事の再開や住宅の確保を検討し始め、当初は福島県内で土地を探し始めたが、不動産価格がとても上昇していた。いわき市などでは坪単価が50万円を超すところもあったので、他を探そうと、最初は「海が近いところ」との思いで、茨城県水戸市へ探しに行った。しかし、自営の仕事再開のためのまとまった土地が少なく断念し、以前、子供を連れて遊びに来たことのある栃木県那須塩原市で新たに探し始めたところ、地元の不動産に「飛び込み」で入った結果、仕事場を含む住宅建築に適し

た場所に出会うことができ、2013年8月に那須塩原市に引越しをして現在に至っている。住宅を再建できたことで、気分的には早い段階で「復興」ができたとおもう。

引越し当初は「福島からの避難」を隠しておこうと思ったが、実際はあまり気にすることなく生活することができた。また、特に自身は福島ということで不快な思いをすることはなかったが、都市部に引っ越した人の中では福島ナンバーの車に傷をつけられた人の話を聞いたことがある。

● 避難所における支援について

郡山ビッグパレットでの避難生活時には、炊き出しのボランティアや自衛隊のお風呂は本当にありがたかった。一方で、避難所間での物資の分配量の不均衡や、在宅避難者が避難所で物資を受け取れないなどの問題も発生していた。また、一人で複数の支援物資や食料等を持ち帰る避難者もおり、この点については、あらかじめ名札等に必要な個数などを明記したものを提示することで問題解決ができたのではないかと思う。

郡山市の避難所ではサッカーの応援のパブリックビューイングが開催されたことや、ディズニーランドのミッキーマウスが避難所にやってきたことは、子供たちにとってとてもよかったと思う。

● 生活再建時の支援について

高速道路の無料化や、医療費の無料化はとても助かった。また、福島からの避難者の交流会なども地元の話や苦労話を共有する機会が持てたことはとてもよかったが、コロナ対策でなかなか会うことができなくなり少し寂しく思っている。

● 故郷「富岡町」について

2013年に富岡町の自宅の「公費解体」を実施。自分で解体してもお金がかかり、また放射線量の関係で、残材の処分にもお金がかかるため、「思い出がある」とも言っていられないが、それでも「残念と言えば残念」な思いがある。

「福島に戻りたいか否か」という質問の答えは「もちろん戻りたいに決まっている」が、本当に大切なことはその場所が「(除染や街の再興を含めて)戻れる環境になっているかどうかということが大切」だとおもう。

現在も富岡町に「住所」を残していることが自身の心の支えの一方、けじめをつけなくちゃいけない...という思いもある。現在は帰宅困難区域のため固定資産税はかかっているが、更地にしたため、今後、もし税金が発生した場合には建屋があったときの6倍の支払いが発生することもあり、子供の世代にこれを残していくことが負担にならないようにしたい。

● 福島復興を実現していくために必要なこと

特に立ち入りが困難な「浪江町」「双葉町」「大熊町」「富岡町」を国が買い上げるなどをして、現在課題になっている原発の「最終処分場」にすることが現実的だと思う。

● これからの世代に伝えたいこと

支援を受ける側がだんだん支援に慣れてしまう現実も見てきており、被災しても、もらうばかりでなく、自分自身での工夫をしていくことが本当に大切だと思う。安全は100%ではないことを自覚することも大切。また、生活を再建していくうえで、仕事などの目標がないと生きがいがなくなってしまうかねず、人と人とのつながりを大切にすることが新しい場所での生活においても重要。自身も那須塩原市の自治会に、2年前に加入し、これを実感。



以上

② 被災者・避難者ヒアリング調査

対象	I 氏 震災当時 63 歳（現在 73 歳）
震災当時居住地	福島県飯館村
現住地	栃木県宇都宮市

● 2011 年 3 月 11 日の「あの日」

震災の日は、南相馬市の病院に入院をしていた身内のお見舞いに行っていたが、発災時には、対角線上に病院のベッドが動くほど揺れた。その日中に、飯館村の自宅まで自動車ですぐに帰ったが、13 日には福島市にある子供（娘）の旦那さんが住んでいる社宅に孫（娘の子供）と一緒に避難をし、小学校が再開するまでの約 1 か月間避難生活をした。孫の学校通学のため、4 月末に飯館村に戻ったが、同時並行で、家族での移住を見据えて親類の住んでいる栃木県宇都宮市のアパートを確保し、自身のみ先行して 2011 年 6 月から宇都宮市に引越しをした。しかし、夫はその後家畜等の仕事のため、飯館村に残り、その後は宇都宮市と飯館村を自身が自動車で往復しながら生活をしてきた。

● 助かった支援について

日本赤十字社からの家電セットなどはとても助かったが、宇都宮市に引越をしたのち、「宇都宮消費者友の会」からの訪問を受けたほか、廃油を使ったせっけんづくりなどで交流の輪が広がったことがとても助かった。支援をいただいたことがとてもたすかり、今後、もし同じような状況になった時には、自分が支援をしていく立場になりたいと思う。

● 飯館村について

東日本大震災から 10 年を契機に、飯館村に再び居住をする予定でリフォームなどを行っている。ただ、剪定や伐採等をした樹木の処分にはお金がかかるが、戻ろうと思ったきっかけは、自身の親族の「家系図」を見る機会があり、自分自身の苦勞だけでなく、先祖の苦勞にも気づき、また、宇都宮での生活ではよいこともたくさんあったけれど、これから先のことを考え、戻る決意をした。

飯館村での生活は、「(宇都宮市のような) 都会の生活」ではない分、大変なこともたくさんあるが、「ふるさと」だからこそ、またその地で住みたいとおもう。

● これからの世代へのメッセージ

いざという時に「避難するという行動を選択することも含めて」自分自身の考えを持っていなければいけないと思う。また、地震発生当初、原子力発電所の爆発による影響についてデマやうわさなどでいろいろ翻弄されたことから、「正しい情報」「確かな情報」を伝えることが大切だと思う。



以上

③ 被災者・避難者ヒアリング調査

対象	K氏ご夫妻 夫：震災当時 62 歳（現在 72 歳） 妻：震災当時 64 歳（現在 74 歳）
震災当時居住地	福島県浪江町
現住地	栃木県那須塩原市

● 発災当日

－（夫）3月11日の地震発生時には、浪江町の病院で医師として外来勤務中に地震が発生した。すぐに外に出たが、駐車場が液状化現象で水が噴き出していた。周りの家は倒壊しておらず、塀も倒れていなかったが余震が大きかったことが印象に残っている。病院には、まだ電気が通っており、16時頃、テレビで宮城県の津波の映像を観た。ただ、浪江町に津波がやってきているかどうかは分からず、当初、病院には地震による怪我等の患者はほとんどやってこなかったが、16時30分ごろ、「津波で流された人」が軽トラックの荷台に乗せられて運ばれてきて、その時初めて浪江町にも津波が来ていることを認識した。運ばれてきた人は全身泥まみれで、目に泥が入ったようで「イタイイタイ」と声を上げており、洗浄等の治療を行った。その後、続けて同じような被害を受けた人が3人運ばれてきたが、17時過ぎに外が暗くなって以降は、患者は運ばれてこなかった。当日は、病院の隣にある自宅には帰らず、にそのまま病院に泊まり、他の入院患者等の対応を行った。病院にだけは電気が通っていたが、周囲の家は停電していた。

－（妻）3月11日は、福島県郡山市で開催されていた写真展にでかけており、タクシーで郡山駅に向かって帰る途中で地震に気が付いた。タクシーが急停車したので、周りを見ると、木造の家がみるみる傾き、人がたくさん道路にでてきていた。その後、郡山駅まではタクシーで到着できたので、そこからは自分の車で288号線に沿って自宅のある浪江町に向かった。当時、旧国道はあまり破損しておらず、当日は道路の渋滞もあまりなく、あまり暗くならないうちに、自宅に戻ることができた。ただ、自宅は停電しており、テレビも見られなかったので、津波が来ていることは、当日は分からなかった。また、携帯電話もつながらなかった。

● 発災翌日からの入院患者等の域外移送

－（夫）発災翌日の3月12日は、病院のロビーや待合室を使って外来診療を再開した。病院のテレビで大きな津波による被害が発生した様子を見たが、宮城県の報道が多く、福島県浪江町の詳しい状況は分からなかった。

朝、7時か8時頃、病院の前に大型バスが3台やってきたので、運転手に事情を聴くと「原

発が危ないので、入院患者を域外に搬送するため」との回答。その時初めて、避難指示が出ていたことを知り、国道 114 号線を見ても、避難をする車で大渋滞をされていて初めて、避難をしなければと思った。

病院には当時 80 人ほどが入院していたが、医療用器具等の都合もあり、バスには 10 人ほどしか乗せられなかった。病院の看護職員もバスに同乗するひとと、病院に残る人に振り分けを行った。3 月 14 日の午後から自衛隊の大型ヘリコプターが近くの公園に着陸し、福島県立医科大学までを当初 3 回の往復で搬送する予定だったが、2 回までしか飛来せず、残りの入院患者約 20 名は、救急車両で南相馬市の原町方面へ搬送を行った。その後、病院関係者も各自で避難を開始した。

－（妻）3 月 12 日に、防災無線での呼びかけを契機に自動車で津島地区まで避難をした。午後 1 時頃まで同地にいたが、パトカーがやってきて「ここは危ないので、川俣町まで避難をするように」といわれ、再び移動。同日は、避難所の川俣高校までたどり着いたが満員で中に入れなかったため、車中で一泊した。翌日（3 月 13 日）に、浪江町の受け入れ先になっていた川俣南小学校に行き、夫と 3 月 15 日に合流。同日、親類のいる相馬市に車で向かった。

－（夫）当時困ったことは自動車のガソリンがないことだった。そのため、車中で過ごすときにも、ガソリンの消費を考慮して暖房をつけることを我慢した。避難をしているときも、原発の事故や放射能に関する情報は全くなく、当初は、2～3 日で避難が解除されるものだと思っていた。自身は「爆発音」を聞いていたが、まさか原子力発電所が爆発をしていたとは想像もしていなかった。

● 相馬市での避難生活から那須塩原市へ

－（夫）相馬市内で避難所を 3 カ所ほど移ったが、避難所での生活が大変だった。同時期にアパートを探し、3 月末には入居し 9 月まで居住。この間、二本松市などの避難所へ診察等の仕事で現地まで通った。その後、医療関係者の知人からの声かけにより裏磐梯に移り、診療所での仕事を行った。当時、裏磐梯のペンションがそのまま避難者の居住用に供されていた。同地からさらに福島市内のアパートに移り、2 年間生活をした。

生活をする中で「浪江町」に帰るのではなく、新たな場所で生活を再建させたいという思いがあり、福島市や郡山市、仙台市のほか茨城県なども含めていろいろ場所を探したが、周囲の自然の環境や住みやすさ、新幹線が通っていることなどから、栃木県那須塩原市に決め、2014 年 12 月に移住した。

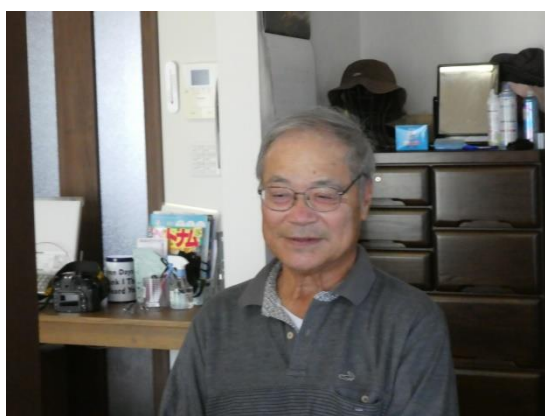
● 避難生活の中で苦勞をしたこと・発災から「10年」の重み

ー (夫)「ガソリン」燃料の不足で苦勞をしたことが大きい。自動車用のガソリンを確実に補給できる場所がなく、特に医療関係者が移動できないことによる対応の遅れが発生しかねなかったこともあり、今後は給油方法の検討をしておくことも重要だとも思う。また、しばらくはゆっくり風呂に入ることができず、その後、ホテルが避難者用に開放したお風呂がとても助かった。こうした支援が早めに実施されるとよいとも思う。

避難者の中では、元号(年号)ではなく、「震災から〇年」という数え方をすることが多く、それだけ震災の影響が大きいと思う。また、「復興」についても元の場所に住宅を再建することや人口が回復することだけが最終の目的ではないと思う。

● これからの世代に伝えたいこと

自分がいつ被災者になってもおかしくないという思いを持ち、これまで当たり前のように言われてきた言葉ではあるが、「自分で常に考え行動をすること」が大切。また、原子力発電所の事故はまだ継続中であり、あの事故によって生活や環境が一変した経験があるからこそ、当初絶対安全といわれてきた「原発」が引き起こしたことの意味を改めて次の世代は考え、判断をしてほしいと思う。



以上

④ 被災者・避難者ヒアリング調査

対象	N氏ご夫妻 夫：震災当時 62 歳（現在 72 歳） 妻：震災当時 64 歳（現在 74 歳）
震災当時居住地	福島県富岡町
現住地	栃木県那野市

● 3月11日のあの日

震災当時は経営している宿泊施設（当時 25～30 人ほど宿泊者がいた）の仕事場にいた。地震発生直後には、何かにつかまらなると立ってられないほどの大きな揺れで、外を見ると自動車が縦揺れしていた。当日は停電し、蝋燭で明かりを取った。翌日（12 日）に駐車場に出てみると、土が一部盛り上がっているところがあったほか、ブロック塀などが道路側に倒れている現場などがあり、地震の大きさを実感した。町の防災無線では川内村への避難を呼びかける放送が流れていた。町からのバスが出る予定だったがいつまでたってもバスが来ないので、自家用車に乗り家族 3 人で避難を開始した。道路は大変渋滞しており、なかなか車列も前に進まなかった。ただし、数日間でまた自宅に戻ることができると思っていたので、ほとんど荷物を持たず、下着類だけをもって避難をした。

● 福島市から新潟市への避難

避難所に指定されていた「かわうちの湯」に到着し、避難用の食事をもらい 1 泊した。翌 13 日に娘が住んでいた福島へ向かったが、途中のコンビニエンスストアでは、既に棚に商品が全くない状態だった。しかし、原子力発電所の爆発のニュースもあり、14 日には、娘さんが転居予定だった新潟県のアパートに 4 人で避難した。ただ、生活空間のこともあり夫は、豊栄体育館（避難所）へ移り 3 月末まで滞在したほか、妻は父親の入院先であったいわき市への新潟との往復などが続いた。

● 新潟市から東京都、そして栃木県へ

この後、3 月末に親類（娘）の住んでいた東京へ移り、当時、避難所になっていた調布の「味の素スタジアム」において 5 月 22 日まで避難生活をした。新たな生活拠点として「江戸川区」や「横浜市」の住宅を紹介されたが、最終的には東京都杉並区の都営住宅に入居した。

都営住宅の生活では、これまで住んだことのない集合住宅の暮らしは、生活音などで多少苦労はしたが、団地内でのお花見会への参加や、東京都内で行われた避難者交流会のほか、スポーツ大会などへも参加することで、少しずつ地域や人との交流を持つことができ

た。この間、東京都内で開催される避難者交流会などにでかけ、そこでのイベントとして、野球観戦や食事会などに参加できたことがよかった。

仕事の関係で既に息子が先に栃木県小山市に居住をしており、宇都宮に勤務をしていたことから、通勤と同居の条件で探したうえで、2018年11月下野市に転居した。

● 震災後の暮らしと仕事・交流会への参加

生活が落ち着くまでに時間がかかり、精神的に落ち込んだりしたこともあった。各種の支援や補償金等があったが、ハローワークで仕事を探し、「働く」ことで、自分の生きがいにもなった。震災後に引きこもりがちになってしまう人も多くいるが、積極的に外に出ることで精神的に救われることもあるとおもう。栃木県に移り住んでからは、新たに避難者の自主的な交流会「あじさい会」に参加をするようになり、同郷の人たちの交流を持つことができることが楽しみになっている。



以上

⑤ 被災者・避難者ヒアリング

対象	S氏ご夫妻 夫：震災当時 58 歳（現在 68 歳） 妻：震災当時 56 歳（現在 66 歳）
震災当時居住地	福島県浪江町
現住地	栃木県那宇都宮市

● 3月11日のあの日

3月11日は、浪江町内の職場にいて、大きな揺れを経験した。自宅は津波による被災はなかったが、すぐに自宅のある地域（藤橋地区）に戻り、家を一軒ずつ回り安否の確認を行った。当日の夜は停電になっており、自家用車の中ですごした。翌日（12日）は、早朝から沿岸に津波の状況を確認に行き、各所に報告等を行った後、浪江町に戻ったが、町の中は、住民が避難をした後で人が全くいなくなっていた。同日は、空中に白色の塵が飛んでおり、今振り返ってみるとあれが原発の事故後のものだったのだとおもう。

同日夜に浪江高校津島分校において、家族4人が合流した。たくさんの避難者がおり、体育館も満員だったが、運よく教室に入ることができた。おにぎりや炊き出しなどを頂くことができた。13日に、避難所の中で配られていた新聞記事を読んでではじめて原発事故が発生したことを知った。それまでは、防災無線などの呼びかけもあり、ただ「避難」をしただけだったので、当初は、「2～3日で自宅に帰ることができる」と思っていて、荷物をあまり持たずに避難をした。ただ、浪江町での避難の指示において「避難先」が具体的に伝えられておらず、原子力発電所の事故で避難をするということ自体を自分自身も想定していなかった。

● 福島から、神奈川県横浜市、さらに栃木県宇都宮市へ

14日に福島市を經由して国道四号線で、埼玉県越谷市まで行き、そこで一泊した後、翌15日に自身の親類（実姉・義兄）の住んでいる神奈川県横浜市まで自動車、家族と移動をした。これは、父親が高齢であったことや、避難所生活で心身への負荷も考えたうえで、避難所からの移動を決断した。住宅の手続き等を終えて3月末には、横浜市内の戸建に移ることができた。

その後、自身は浪江町の職場の移転などの作業のため福島に戻り、避難所になっていたあづま総合運動公園（福島市）に入った。5月には、息子は横浜のハローワークで新しい仕事を探し、宇都宮市で職を得て転居した。横浜市には、引き続き、妻、父親および娘と孫の4人が暮らし、自身も平日は福島で仕事し、週末に横浜へ往復をしながら生活をした。同年8月に、家族で宇都宮市の戸祭台に移り、5年間住み、2016年4月より現在の場所に

自宅を再建して生活をはじめた。この間、2012年には自身がハローワークに通い、南相馬市役所の経済部の嘱託職員として農業支援や被災者支援の仕事を担当し、南相馬市に単身（途中から父親も同居）で移り、アパートを借りて2017年まで働いた。

● いわきナンバーの自家用車

自分たちの自家用車がいわきナンバーであったこともあり、転居した先では「福島からの避難者」であることは知られていたと思うが、特に嫌がらせを受けたことはなく、逆に、地域の人にとっては、どのように声をかけたり接したりしてよいかわからないこともあったと思う。

● 原発事故により一瞬で「限界集落」化したふるさとで、次にできること

第一次産業（農業）からの再生・復興をめざすことが大切だと思う。2017年の5月から始めた取組において、「藤橋生産組合」「藤橋地域資源保全会」「藤橋復興組合」を組織し、震災により各地に避難をしている藤橋地区の人たちに呼びかけを行い、定期的に共同で行う田植えや稲刈りなどの農作業を通して「地域の復興」に取り組んでいる。2カ月に一回会報を発行し、参加の呼びかけを行っている。震災からの時間を経る中で、浪江町へは「帰る」から「行く」という言葉に代わりつつあるが、それでも、地域の思いを伝える場として続けていきたいと思う。

● 浪江町に対する思い・双葉町の原子力災害伝承館での語り部として

後世に残すものには、「石仏」、「書物（記録）」、「語り」の3つ方法がある。このなかで、自分は、「語り」の方法において、原発からの避難という自身の経験を客観視したうえで研修等を受講し、現在は、双葉町にオープンした「東日本大震災・原子力災害伝承館」で語り部として経験を伝える仕事にも取り組んでいる。



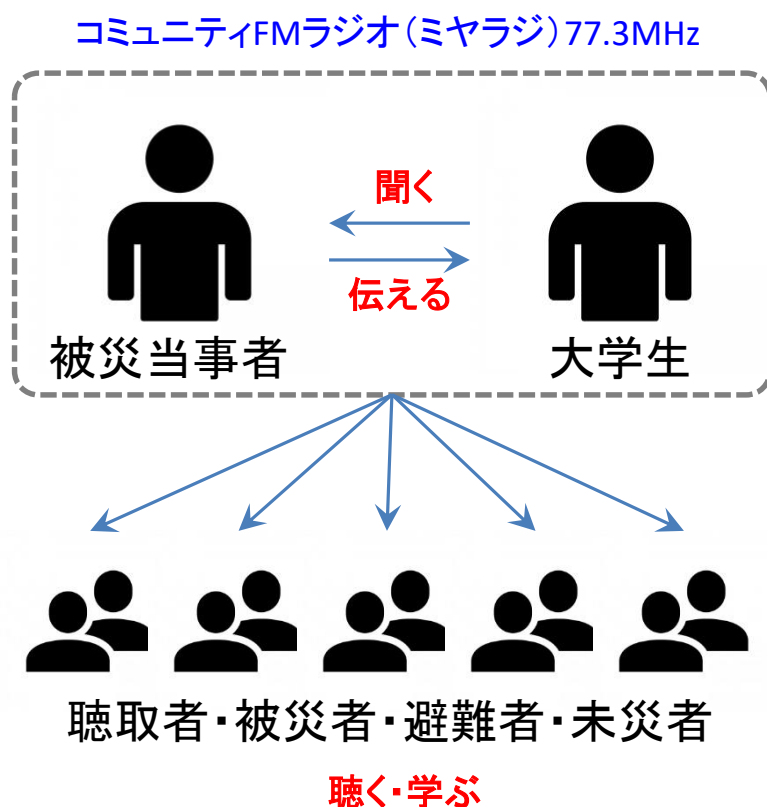
以上

第5部 次世代への継承と社会への発信

被災における「個人の経験」を「社会の記憶」に

被災経験と教訓の次世代への継承と社会への発信

被災の経験を語り継ぐ取組は、過去の災害においても実施されてきている。本事業では、この取組の一環として、現役の大学生が被災者に直接インタビューを行い、さらにコミュニティエフエムラジオ放送（ミヤラジ 77.3MHz）を通じて、社会や地域への発信を行う「継承」を実施した。さらに、本事業で行った調査の概要を福島県から栃木県への避難者を対象として機関誌「とちぎ暮らしの手帖」を発行した。



東日本大震災の発生から 10 年を経る中で、「被災当事者」と「支援者」間での支援活動のほか、「被災当事者」と「被災当事者」によるコミュニティの構築と活動などが行われてきた。本取組みでは、「被災当事者」と、直接被災をしていないものの、発災時に小学校高学年世代であり、当時の世相の記憶を持つ「大学生」とのクロストーク（聞く・伝える）からの経験の継承を試みた。具体的には、宇都宮市に拠点を持つコミュニティ FM 局（ミヤラジ：77.3MHz）において、これを実施し、「聴取者」に、聴く・学ぶ場とした。

次頁は、同ラジオでパーソナリティを担当した「大学生」（学生ラジオパーソナリティ）が執筆した「被災当事者」とのラジオ対談を終えたのちの感想記事（ラジオブログ）である。

● あれから 10 年

2011 年 3 月 11 日午後 3 時前。あの日あの時、みなさんは何をしていただろうか。ラジオで問いかけると、音大の学生で歌っている最中だった、小学生で家庭科の授業中だった、決算報告書を作っていた、ちょうど社会人になるはたちの年で運転中だった・・・と、鮮明に記憶に残るあの日のことを教えてくれた。東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）の最大震度は 7、日本列島すべてが揺れた。栃木県でも 6 強を観測している。太平洋沿いでは大津波が無惨にも多くの命を奪い、そのほかの地域でも、停電、断水、液状化現象、倒壊など様々な被害をもたらした、歴史に刻まれる「大災害」となった。時を同じくして「大事故」が起こる。原発事故（福島第一原子力発電所事故）である。ゲストはこのことに関しては決して被災者とは言わなかった。被害者なのだと。あれからもう少しで 10 年。わたしたちはこの節目に何を考え、何ができるのか。

● 福島県浪江町からの避難者 佐々木さん

ゲストの佐々木さん（68 歳）の家は当時ニュースでよく聞いた地名のひとつである、浪江町（なみえまち）にあった。そこは地震、津波、原発事故の 3 つの災難が降り注いだ地域である。地震の 1 日目は、余震が続いたため車中で過ごし、3 日目に大渋滞の末ようやくの 30 キロ先の高校に避難した。そして、4 日目に避難所に届いた新聞で福島原発の事故を知ることになる。すぐに帰宅できるだろうとなにも持っていなかった佐々木さん一家は一旦家に戻ろうとするが、とあるラインから先は防護服を着た警官に止められた。誰も被害を把握できていなかった当時、原発事故の避難区域となった半径 20 キロの範囲には救助隊ですら入れなかったそうだ。その中にはまだ、津波で流された人や建物の下に取り残されていた人がたくさんいた。原発事故がなければ救われた命がどれだけあったらだろうか、という佐々木さんの言葉に胸が痛んだ。5 日目に姉と電話がようやく通じ、高齢の父親にとって避難所での生活は大変だろうということで、すぐに姉のいる神奈川県横浜市へ移動した。そこでアパートを借り 4 ヶ月間過ごした。その後、息子がいままでの仕事に見切りをつけ、栃木県宇都宮市で新たな仕事を見つけたため、避難移動し現在も暮らしている。

一度、一世帯二名まで避難地域内へ一時帰宅が認められ、ゴミ袋大の袋二つ分、家のものを持ち出だせるという機会があった。多くの方は子どもの写真や自分の卒業アルバム、貴金属等を持ち出したそうだ。再発行できる預金通帳、保険証等よりも、唯一無二の思い出の品の方がずっと価値がある。本当に大切なモノはなにか考えさせられるエピソードだった。それとともに、避難生活が長くなることへの不安を抱きながらの一時帰宅であったらう彼らの心の内は計り知れないと思った。

● 故郷・福島への想い、そしていま、栃木に住み続ける理由

福島県浪江町藤橋地区は2017年3月に避難解除された。定期的に帰って家の手入れをしているそうだ。伝承館で語り部も行っている。実は避難解除の前から、福島県南相馬市（みなみそうまし）に通い、農業経営改善支援の嘱託職員として復興支援に取り組んできた佐々木さん。意識は常に故郷・福島へ向いているように見える佐々木さんが、なぜ故郷へ戻らないのか。それは、避難先での生活が根を張ったからだ。高齢の父親は宇都宮の病院や介護支援を利用して、息子には仕事がある。近所づきあいもするようになって、ここ宇都宮で「普通の生活」ができています。子どものいる家庭なら学校があるし、避難先で結婚したり、家を買ったりしている人もいるだろう。もう多くの避難者にとって避難先が避難先ではなくなっている。もう10年も経つものだからあたりまえだ。それが故郷を捨てたことにはならない。故郷を想う気持ちは必ずある。しかし、現実には、やっと安定した今の生活を手放し、また一から生活を築き直すことは簡単なことではない。原発事故に非があるのは、放射能の身体的被害よりもずっと、この「普通の生活への問い」なのではないかと思う。二律背反の想いを背負い、今できる最良の選択でそれぞれの人生をそれぞれの場所で歩んでいる人たち。そんな人たちがいることを忘れてはならない。

佐々木さんが最後に語ってくれたのは、横浜でも宇都宮でも、自分たちに「普通の生活」をさせてくれた周りの方々への感謝だった。特別に世話してくれるわけでもなければ、非難されるわけでもなかったが、それがありがたい。「どうお声がけしたらよいか分からなくて…ごめんなさい」と素直に言ってくれる方もいたそうだ。いつまた起こるか分からない災害や原発事故から立ち上がるのに必要なのは、「受け入れること」。そう締め括った佐々木さんの表情はとても穏やかだった。（パーソナリティ 藤倉理子・宇都宮大学3年生）



本人（藤倉理子）左から2人目とゲスト（佐々木氏）中央

栃木の避難者、10年目アンケート

「あなたの記憶」を「社会の記録」にして、これからの世代に伝えること。

東日本大震災から10年、福島県から栃木県へ避難して10年が経ちました。これまでの軌跡を記録し、次世代へ伝えるためのアンケートとして「とちぎ暮らしの手帖」に掲載します。10年目を迎えるあなたに、ぜひご回答をお願いします。

【アンケート実施】
 ◎回答率10%
 ◎住んで10年、半数が「住んでからの引越」
 ◎「住んでからの引越」は、避難生活から10年経った後の生活環境の変化を捉える重要なポイントです。引越した理由や、引越した後の生活環境の変化について、ぜひご回答をお願いします。

【避難生活の振り返り】
 ◎「避難生活の振り返り」は、避難生活から10年経った後の生活環境の変化を捉える重要なポイントです。引越した理由や、引越した後の生活環境の変化について、ぜひご回答をお願いします。

【今後の生活環境】
 ◎「今後の生活環境」は、避難生活から10年経った後の生活環境の変化を捉える重要なポイントです。引越した理由や、引越した後の生活環境の変化について、ぜひご回答をお願いします。

【今後の生活環境】
 ◎「今後の生活環境」は、避難生活から10年経った後の生活環境の変化を捉える重要なポイントです。引越した理由や、引越した後の生活環境の変化について、ぜひご回答をお願いします。

【今後の生活環境】
 ◎「今後の生活環境」は、避難生活から10年経った後の生活環境の変化を捉える重要なポイントです。引越した理由や、引越した後の生活環境の変化について、ぜひご回答をお願いします。

とちぎ暮らしの手帖 vol.37 2

アンケート調査をもとに実施!

2021 3/7 (日) 13時-16時

ミヤラジ FM 77.3MHz

【3.11 福島からの避難10年目ラジオ】

次世代に伝える避難。東日本大震災から10年 津波・原発事故での避難を語る3時間

●4人の避難者のラジオ・リハーサル
 ◎ご意見・感想も受け付けます。ラジオでも大丈夫です。

■ラジオ出演：話し手：福島からの避難者3～4人。聞き手：学生ラジオパーソナリティ3人。矢野正成（応援会スタッフ）など。
 ◎コミュニティFMミヤラジ（宇都宮県峡内）はFMラジオで直接聞けます。
 ◎パソコン、スマホでも「ミヤラジアプリ」でもどこからでも聞けます。

■予約番組 / 避難者が40分語ります。
 1/26、2/16、2/23 毎週火曜 19:00-20:00 「みんな違ってみんな良い」
 (とちぎ暮らしの手帖 vol.37)

※事前の体験も受け付けます。 FAX028-623-6036 ■メール info@tochiginet.jp

とちぎ暮らしの手帖 vol.37

地図で見る「あの日」からの10年

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、原子力発電所の事故で福島県から多くの人々が避難を余儀なくされました。震災から3か月後の6月に集計された避難者数の推移を見てみましょう。

最も多かったのは避難期間 7,386人。次に山形県 6,348人、東京都 2,941人で、栃木県は2,528人が避難していました。

今年の12月11日時点で福島県から全国の避難者圏への避難者は16,489人と記録されています。近隣の東北地方への避難者は15,450人と前年より、避難者数へは44.1%、中間地へは14.8%の人が避難をしました。一方で、県外への避難者数は震災から1年後82,831人をピークに減少し、昨年度の30年11月11日時点では26,399人と半減しています。こうした人たちは、依然として避難先地にあるなかで、「住宅等（仮設・仮設・仮設貸等）」を生活拠点として新たな暮らしをはじめています。一方で避難先から継続して「親類等（親族・知人等）」を生活拠点としている人たちもいます。

復興の過程では栃木県へ避難している人たちは、現在2,285人で、そのうち住宅等に2,009人（87.9%）、親類等に727人（31.9%）、その他施設等に12人（0.7%）が生活しています。

宮城、栃木は増えています
 ◎避難者数の増加に伴って、宮城、栃木の避難者数は増加しています。宮城は前年比+10.5%、栃木は前年比+10.5%の増加が見られます。

こんな支援があった
 ◎「支援のサポートセンター」は、避難者への支援を行うための拠点です。宮城、栃木の両県で、それぞれ1か所ずつ設置されています。宮城は、仙台市太白区にあり、栃木は、宇都宮市にあり、それぞれ24時間体制で運営されています。

とちぎ暮らしの手帖 vol.37

助かった支援

「助かった支援」は、避難者への支援を行うための拠点です。宮城、栃木の両県で、それぞれ1か所ずつ設置されています。宮城は、仙台市太白区にあり、栃木は、宇都宮市にあり、それぞれ24時間体制で運営されています。

【心のケア】
 ◎「心のケア」は、避難者への支援を行うための拠点です。宮城、栃木の両県で、それぞれ1か所ずつ設置されています。宮城は、仙台市太白区にあり、栃木は、宇都宮市にあり、それぞれ24時間体制で運営されています。

【心のケア】
 ◎「心のケア」は、避難者への支援を行うための拠点です。宮城、栃木の両県で、それぞれ1か所ずつ設置されています。宮城は、仙台市太白区にあり、栃木は、宇都宮市にあり、それぞれ24時間体制で運営されています。

【心のケア】
 ◎「心のケア」は、避難者への支援を行うための拠点です。宮城、栃木の両県で、それぞれ1か所ずつ設置されています。宮城は、仙台市太白区にあり、栃木は、宇都宮市にあり、それぞれ24時間体制で運営されています。

とちぎ暮らしの手帖 vol.37

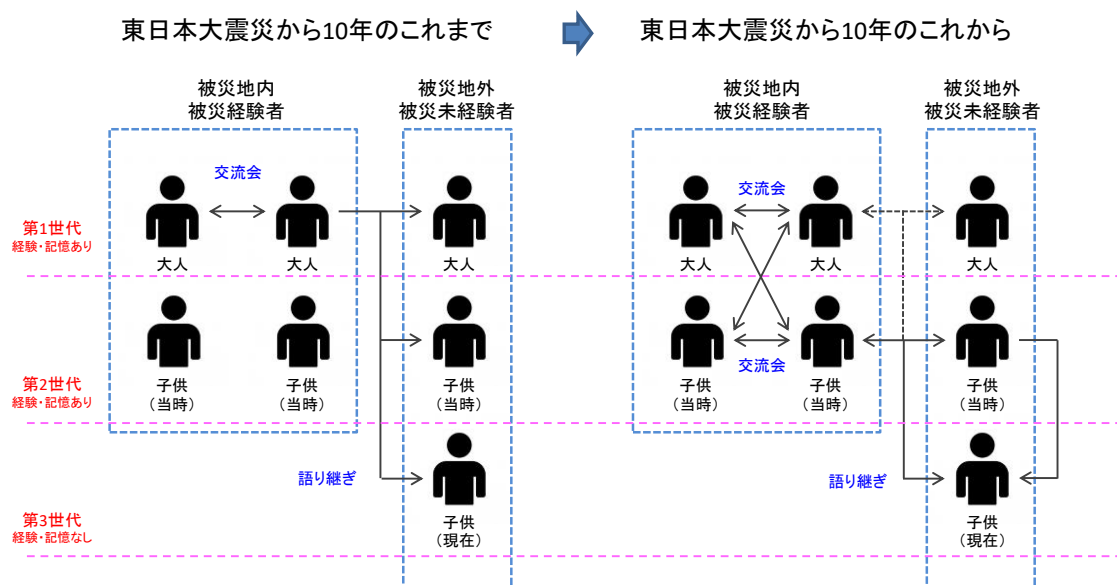
第6部 災害を「伝える」を考える

被災における「個人の経験」を「社会の記憶」に

● 被災経験の継承と共有—「次」「他」「多」世代と地域に向けた伝え方の検討—

東日本大震災の発生から「これまで」の10年間において、政策、法制度、建築技術、情報通信技術、被災者支援の仕組みなど多様な分野において検証と改善が進められてきた。新たに開発・策定された技術や知見は、この間に各地で発生した災害で援用され、既に社会実装され、機能し始めているものも数多く存在する。また、被災の経験を伝えるための取組においては、被災当事者が、「語り」「伝える」ことで、被災未経験者が実情を「知る」「考える」ための貴重な機会と場が供されている。

被災の経験を「語り」「伝える」ための取組みは、メディアなどで伝えられる事実や事象としての「Information (インフォメーション)」ではなく、他者や多世代、次世代、他地域への「Communication (コミュニケーション)」という位相を持ち「関係の中での伝わり方・伝え方」を有する点が特徴となっている。しかし、災害や被災に関する Communication のベクトルは、その特性上、被災経験者（大人＝第1世代）から被災未経験者に対する一方向にならざるを得ない部分も有している点や、被災者間においても、現在行われている交流会の多くは、「大人」世代に偏重し、特に当時の「子供」世代間の Communication が必ずしも充分でなかったことも課題として挙げられる。こうした課題を踏まえ、「これから」を考える中において新たに要される枠組みには、被災当事者の「世代間交流」と同時に、被災経験者の当時の「子供」（第2世代）が、10年間を経て成長した現在において新たに双方向性をもって「伝える主体」となっていくことが重要である。これにより、災害の教訓や経験を「残す」だけでなく「つなぐ」ことで、さらにこの先に向けた継承の基盤を図り、今後の災害に対する備えを図っていくことが求められる。



● 次世代キュレーション（Curation）－災害を学ぶ「防災教育」に向けて－

わが国では、2005年に中央防災会議の中に「災害被害を軽減する国民運動の推進に関する専門調査会」が設置されて以降、2010年に策定された「地域連携型防災活動育成促進モデル事業」において、「地域で一体的に取り組む防災活動」の推進が行われてきた。また、2011年3月11日の東日本大震災を受け、翌年には、災害対策基本法の一部改正が行われ、この中に「防災教育」実施の重要性が明記されるなど、現在では、地域に属するひとりひとりの防災意識の向上を図り、地域内の連携促進が求められている。

地域防災力とは災害を未然に防止し、災害が発生した場合における被害の拡大を防ぎ、災害の復旧を図る力を指し、この強化に向けては、官・学を挙げた取組みの重要度がより一層増してきている。同法改正の中では、その理念として、地域の災害履歴や防災に関する「知識」、協力して災害に立ち向かう「態度」、安全な避難や的確な救急救命を实践できる「技能」を平時から育成していくことの重要性が掲げられている。

しかし、官・学双方にとって課題となっているのは、1) 事業内容や素材の技術・コストの限界、2) 参加者の常態化・年中行事化、3) 投入コストや労力に見合った効果の見えにくさ等が挙げられている。特に、初等中等教育課程にある児童・生徒にとって、発災後に実際に行動に移すための「知識・技術・動機」を普及・啓発していくためには、従来の取組みに加え、「過去の災害の学び方」において、体験談を「聞く」だけにとどまらない、新たな枠組みが要されている。

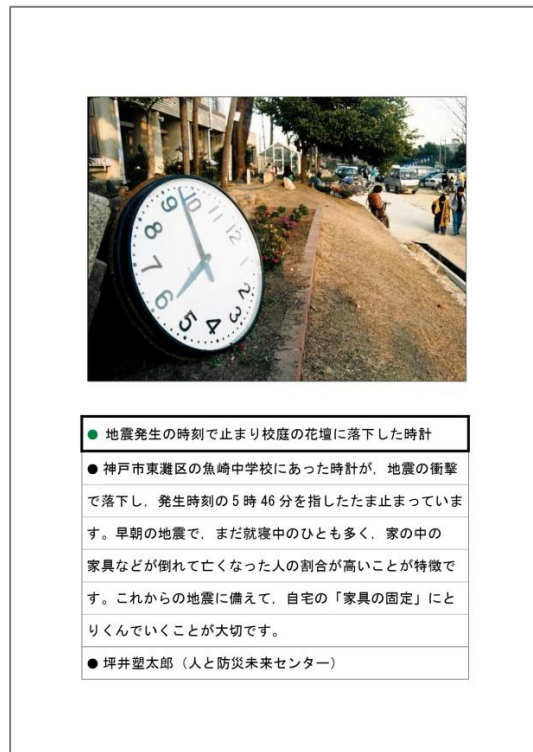
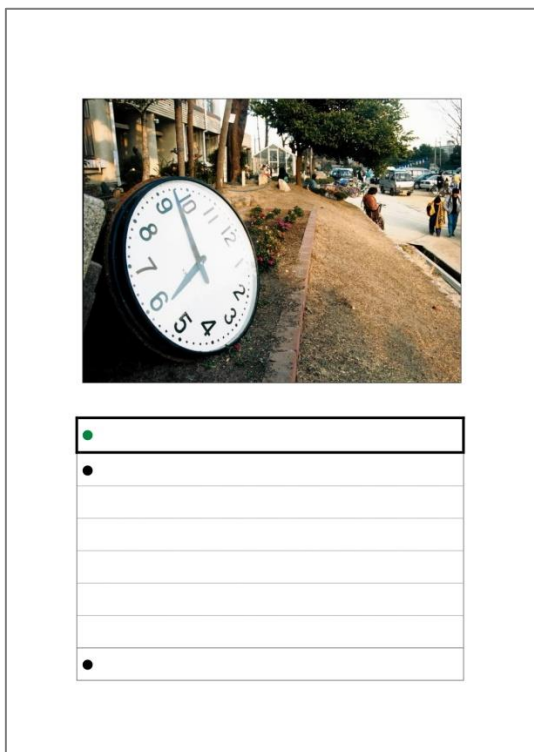
1995年に発生した阪神・淡路大震災から26年が経過し、当地においては、「震災を知らない世代」が多数を占め始めている。こうした世代への伝え方の事例をもとに、東日本大震災での経験を「社会化」していくための方策案を提示する。本報では、兵庫県南あわじ市において震災25年目に実施された「次世代キュレーションプログラム」の事例を示す。「キュレーション」(curation)とは、情報を選んで集めて整理すること、あるいは収集した情報を特定のテーマに沿って編集し、新たな意味や価値を付与する作業を意味する。

本プログラムの主目的は「災害当時の資料に向き合い、当事者または非当事者(未災者)自らが「あの時」について、資料のキャプションの作成や解説の作成を行うことで、資料(写真、映像、手記等)がもつ意味を体感し、災害を「忘れない」から「伝える」ための姿勢を学ぶことにある。具体的には、震災当時のニュース映像や写真資料等をもとに、講師(被災当事者、教員等)から概略説明を行った後、受講者自身でキャプション作成や解説原稿等を作成する。出来上がった資料を基に、作成者から発表を行い討論、知見の共有および講師からの補足等を行い、壁新聞等にまとめて掲示発表を行う。

災害における経験や知見を伝えるために様々な方法が提示・実践されてきている。「次世代キュレーション」はそのひとつであるが、受講者が「自ら」「能動的」に資料に向き合い、発信するという点において特徴を有する。今後に向け、東日本大震災、福島、原発をどのように位置付け教材化するのかという点において議論を展開していくことが重要である。

(完)

※ 写真を用いたキュレーションによるキャプション作成の例 左（作業前）右（作業後）



※ 作成作業・発表・壁新聞掲示



参考資料
(質問紙調査票)

東日本大震災から 10 年—あの時・これから— あなたの声をこれからの世代に伝えるために

1. ご自宅の被害状況・現在の暮らしについておうかがいします

問 01 あなたの年齢・性別に当てはまる番号に○印を記入してください。

性別	1. 男性	2. 女性	3. その他	
年齢	1. 10代	2. 20代	3. 30代	4. 40代
	5. 50代	6. 60代	7. 70代	8. 80代以上

問 02 あなたが震災前にお住まいだった市町村名を記入して下さい。

福島県	
-----	--

問 03 あなたが震災前にお住まいだった地域の原発事故後の避難区域指定について、あてはまるものに○印を記入して下さい。(○はひとつ)

1. 警戒区域	2. 計画的避難区域
3. 緊急時避難準備区域	4. 特定避難勧奨地点
5. 汚染状況重点調査地域	6. 指定なし

問 04 東日本大震災における、あなたのご自宅の被災について「り災証明」の認定内容にあてはまる番号に○印を記入してください(○はひとつ)。

1. 全壊	2. 大規模半壊	3. 半壊
4. 一部損壊	5. 無被害	6. わからない

問 05 震災後に、あなたが栃木県内にはじめて引越したのはいつですか？

(西暦・平成)	年	月	に栃木県内に初めて引越
---------	---	---	-------------

問 06 あなたの「震災前」と「現在」のおすまいについて、それぞれあてはまる「+」の箇所に一箇所ずつ○印を記入してください。

	持ち家 戸建住宅	持ち家 集合住宅	賃貸 戸建住宅	賃貸 集合住宅	復興公営 住宅	その他
震災前	+	+	+	+		+
現在	+	+	+	+	+	+

問 07 震災後から現在までにおいて、何回、避難拠点（避難所・避難施設等）とその後の生活居住拠点（住宅等）を移動しましたか？回数を記入して下さい。

避難拠点（避難所・避難施設等）	回
生活居住拠点（住宅等）	回

問 08 下記の項目について、あなた自身の「震災」の発生から「現在」までの変化についてあてはまる「+」の箇所をひとつずつ記入して下さい。

	ほとんど なくなった	とても 減った	やや 減った	変ら ない	やや 増えた	とても 増えた
現在、生きがいを感じる事	+	+	+	+	+	+
現在、被災者であると感じる事	+	+	+	+	+	+
現在、心身が健康的であると感じる	+	+	+	+	+	+
現在の行政等からのサポート	+	+	+	+	+	+
将来に「不安」を感じる事	+	+	+	+	+	+
現在の近所付き合いや交流の度合い	+	+	+	+	+	+
現在、震災の「風化」を感じる事	+	+	+	+	+	+
現在住んでいる地域への愛着	+	+	+	+	+	+

2 震災後の支援についておうかがいします

問 09 震災後の支援について、あなたご自身が利用・活用したのものについてあてはまるものすべてに○印を記入して下さい。

- | | | |
|----------|------------|-----------|
| 1. 雇用の支援 | 2. 学習・教育支援 | 3. 法律相談 |
| 4. 生活相談 | 5. 心のケア・相談 | 6. 避難者交流会 |

問 10 震災後の支援について、支援金や補助金以外の支援について、「こんな支援がとても助かった」とおもうものをできるだけ具体的に記入して下さい。

問 11 震災後の支援について、「こんな支援が欲しかった」とおもうものをできるだけ具体的に記入して下さい。

問 12 東日本大震災の経験を通して、あなたがこれからの世代に「伝えたい」とおもう、メッセージや教訓は何ですか？できるだけ具体的にご記入ください。

3 震災発生から現在までの変化についておうかがいします

問 13 下記の項目に対してあなたの実感に当てはまる時期の「+」の箇所には○印をひとつずつ記入して下さい。

	発災から1か月後	2か月～5か月後	6か月～1年後	2年～3年後	4年～5年後	6年～7年後	8年後～現在	まだ解決していない
住まいの問題が一応解決した	+	+	+	+	+	+	+	+
仕事の再開のめどがついた時期	+	+	+	+	+	+	+	+
現住地での人のつながりの実感	+	+	+	+	+	+	+	+
経済的な落ち着きの実感の時期	+	+	+	+	+	+	+	+
こころの落ち着きの実感の時期	+	+	+	+	+	+	+	+
現住地での生活の落ち着き	+	+	+	+	+	+	+	+
震災からの復興を実感した時期	+	+	+	+	+	+	+	+

問 14 あなたご自身の現在の生活は、「震災前」を100%としたときに、「現在」どのくらいまで回復していると思いますか？（○はひとつ）

1. 0～20%	2. 30～40%	3. 50～60%
4. 70～80%	5. 90～100%	

◎ 現在、東日本大震災における、みなさまの体験や思いを記録し、次の世代に伝えていくための取り組みを行っています。可能な限りお話をお伺いいたしたく、下欄に連絡先のご記入をお願いいたします（記入は任意です）。

氏名		電話	
E-mail			

報告書

福島からの原発避難と生活復興－栃木県における避難生活に関する課題調査
2021年

編集・発行 認定NPO法人とちぎボランティアネットワーク（とちぎ暮らし応援会）
事務局 〒320-0027 栃木県宇都宮市埜田 2-5-1 共生ビル3階
電話 028-622-0021 E-mail info@tochigivnet.jp